世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE

世田谷パブリックシアター“知恵の収蔵庫”#1

シンポジウム
「教育×演劇×地域
未来を担う子どもたちを育てる
～豊岡と世田谷の教育の新しい試み」

2024年5月25日（土）15：00～17：30

本冊子は、2024年5月25日に開催されたシンポジウムを
若干の加筆修正の上まとめ直したものである。

シンポジウム
「教育×演劇×地域
未来を担う子どもたちを育てる
～豊岡と世田谷の教育の新しい試み」

日時　2024年5月25日（土）　15：00～17：30

登壇者　嶋公治（豊岡市教育長）
平田オリザ（劇作家・芸術文化観光専門職大学学長）
宇都宮聡（世田谷区立教育総合センター長）
白井晃（世田谷パブリックシアター芸術監督）
［司会］高尾隆（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）

場所　世田谷文化生活情報センター セミナールームA・B
主催　公益財団法人せたがや文化財団
企画制作　世田谷パブリックシアター
後援　世田谷区

シンポジウム
「未来を担う子どもたちを育てる
～豊岡と世田谷の教育の新しい試み」

登壇者

嶋公治（豊岡市教育長）
平田オリザ（劇作家・芸術文化観光専門職大学学長）
宇都宮聡（世田谷区立教育総合センター長）
白井晃（世田谷パブリックシアター芸術監督）
[司会] 高尾隆（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）

恵志　皆さま、本日はシンポジウムにご来場いただき誠にありがとうございます。私は世田谷パブリックシアターの恵志と申します。今回は豊岡市の教育委員会の皆様、平田オリザさん、世田谷区教育委員会の皆様のご協力をもちまして、このシンポジウムを開催することができました。豊岡市と世田谷区、学校で演劇を取り入れる活動を先進的に行っている二つの事例をもとに、これからの子どもたちに私たちに何ができるかを考えていく機会としたいと思っています。今日のシンポジウムの司会をお願いしているのは東京工業大学の高尾隆さんです。あとは、もうお任せしていいということなのでお任せします。よろしくお願いします。

高尾　はい、ただいまご紹介にあずかりました高尾隆と申します。普段は東京工業大学リベラルアーツ研究教育院というところで、コミュニケーション論の担当をしていますけれども、専門は演劇教育、インプロという即興演劇になります。今日は司会をさせていただきます。
はじめに、今日の登壇者の皆さんにご登壇の順番で短く自己紹介をお願いしたいと思います。嶋さんからよろしくお願いします。

嶋　皆さんこんにちは。豊岡市教育長の嶋でございます。豊岡市の教育委員会の取り組みについては後で紹介させていただきますけれども、豊岡市は、毎年夏に1回か2回は報道されて日本一になることがあります。「日本一暑い町」です。盆地ですので、暑い町からやってきましたが、東京に来るとこちらの方がなんか暑いかなと思いました。今日熱いトークができたらなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

平田　同じく、豊岡市から来ました、平田といいます。芸術文化観光専門職大学という兵庫県立の日本で初めて演劇やダンスの実技を学べる公立の大学ができました。そこの学長をしております。皆さんお忘れかと思いますが、劇作家、演出家もしております。よろしくお願いいたします。

宇都宮　世田谷区上祖師谷から来ました宇都宮と申します。世田谷区の若林に世田谷区立教育総合センターというのがありまして、そこのセンター長をしています。乳幼児教育とか、特別支援教育、教育相談と職員研修、ICT、そして区の職員研修、それから大学連携と、非常に幅広いジャンルを受け持っているセンターです。よろしくお願いいたします。

白井　世田谷パブリックシアターの芸術監督を2年前から務めさせていただいております白井晃です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

高尾　どうもありがとうございました。今日は前半にこの4人の登壇者のお話を順に伺い、後半では登壇者相互に質問をしたり、コメントをしたりするクロストークの時間を予定しています。最後には皆さんからも質問をいただいて、登壇者の方にお答えいただく時間をとりたいと思っています。今日のシンポジウムのテーマは「未来を担う子どもたちを育てる～豊岡と世田谷の教育の新しい試み」です。もちろん、豊岡、世田谷の教育を交流するということでもありますけど、ここにいらっしゃる多くの皆様と、特に豊岡、世田谷ということと関係なく、日本の教育のこれからの新しい潮流ですとか、それに向けて演劇ができることですとか、そのようなこと考えられる時間にできたらなと思っております。では、最初に嶋さんからお話をいただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

嶋公治氏 発表

豊岡市の特徴

それではまずトップバッターで、豊岡市の教育についてお話をしたいと思います。まず豊岡はどんなところかというと、平成17年に一つの市と五つの町が合併してできた人口7万7000人の市です。特に全国的に有名なのがコウノトリです。今300羽ぐらい普通に飛んでいます。

観光業では城崎温泉がありますし、鞄産業が中心の町です。学校数は、もう世田谷とは全く違って、小学校22校、そして中学校9校です。私は今年で教育長8年目に入りますが、この8年間で7校閉校しました。子どもの数が減ってしまって統廃合したわけです。(*1)

全校生徒が20人という小さな学校もあります。そうするとどんなことが起きるかというと、もう幼稚園のときから中学校を卒業するまで、ずっと同じメンバーで、誰々ちゃんはどんなことが得意で、どこに住んでいて、お父さんはどんな職業で、どんなことが苦手で、走りは得意だけど、勉強はどうなのかなど、なんでも互いにわかっています。だから、順列が維持されたままになりますし、多様性がほとんどありません。だからうまくいくことも、悲しいことも起こるんですけども、子どもを取り巻く状況としては、これが豊岡市の一番の特徴であると思います。

コミュニケーション教育の導入と経緯〜「コミュニケーション授業」と「演劇ワークショップ」

今日は、「コミュニケーション教育」の導入と経緯についてご紹介したいと思っていますが、豊岡市がやっている演劇的手法による教育アプローチには2種類あります。まずは、小学校6年生と中学校1年生を対象とした「コミュニケーション授業」。それから、小学校の1年生と2年生を対象にした「演劇ワークショップ」。この二つの事業を実施しています。「コミュニケーション授業」は平成27年にモデル校5校でスタートしました。

その前年、平成26年に平田オリザさんが豊岡の「城崎国際アートセンター」の芸術監督に就任されました。「城崎国際アートセンター」は、豊岡市の文化芸術戦略の拠点で、アーティストが滞在して創作に集中できるアーティスト・イン・レジデンスの施設があります。私はその頃は市内の小学校の校長をしていました。

教育委員会と平田さんとでこれからの教育について話す機会があり、平田さんからこれからの教育にはコミュニケーション教育、コミュニケーション能力を向上させるアプローチが必要だという提案があったそうです。そして、私の学校が教育委員会から一番近い学校だったこともあって、私の学校で平田オリザさんのワークショップをやることになりました。

実施にあたって、教育委員会からそういう提案が出ていると校内の教員に話したところ、ある教員が「僕のクラスでやらせてください」といったんですね。その教員は新潟大学で、VIVANTなどにも出演している河内大和と一緒に4年くらい演劇もやっていた教員だったんです。平田さんの演劇ワークショップが終わった後、二人で話していたのですが、二人とも印象に残っていたことが同じでした。

平田さんの演劇ワークショップを行ったクラスには、2年前に富山から引っ越してきたKくんという子がいて、彼は生活背景も大変苦しくて、学校も遅刻するし、授業中も眠そうな面白くないって顔をしているし、いつも一番後ろに座って授業を受けていました。その子が平田さんの授業の時だけは、平田さんが「じゃあみんな集まって」と言うと一番前にいたんです。私にとってはすごく衝撃的でしたし、担任もびっくりしていました。何かが起こったんですね。コミュニケーション授業や演劇ワークショップが最も教育効果をもたらすのは、学びから逃避しがちの子とか、あるいは生活背景が苦しくて、社会的背景が苦しくて、そしてコミュニケーションをうまくできなかったり、学級に馴染めなかったりという、そういう子たちだと思います。その子たちにこそ、こうした教育が必要で効果があるという、そんな実感を持っています。

市町村合併から始まった教育改革

1市5町が一緒になる市町村合併が起こったのは、コミュニケーション授業のスタートから遡ること10年ほど前ですけれども、当時はもうそれぞれの学校がそれぞれバラバラにいろんな方向を向いていました。そのため、時の教育長が何か旗印が欲しいと言い出し、教育課題を整理する中で、三つの課題がでてきました。

一つは不登校の問題。もう一つは小学校6年生から中学校に上がるときに、学力に二極化が起こる問題。それから特別な支援を要する子どもたちへの対応が小学校と中学校で全く違うという問題です。この三つの課題を解決するために、小学校と中学校がもっと連携して仲良くなろうという話が出ました。ちょうど17年前のことです。その頃私は研修センターの所長で、私の管轄だったため、「小中連携教育」を始めました。二、三年継続すると、学校の文化として取り入れられるようになり、まずまずう

まくいきました。でも、不登校の課題解決には至りませんでしたし、学力の二極化を確実に解決することもできませんでした。

そのため、平成29年からは「小中連携教育」を「小中一貫教育」という名前に変え、3本柱でプランを構成することにしました。一つ目が「ふるさと教育」。二つ目が「英語教育」。三つ目が「コミュニケーション教育」です。(*2)

「コミュニケーション教育」については、四つの視点を設けました。「他者を理解すること」、「自己を見つめること」、「他者と協働すること」、そして、「表現活動を取り入れて課題に取り組むこと」の4つです。これを小学校、中学校9年間かけて全ての子どもたちに全ての授業で展開をし、「演技的手法を取り入れた授業」を、小6、中1にやることになりました。なぜかというと、小6から中1にかけて、不登校がとても多かったからです。この小6、中1を繋ぐために演劇的手法を活用しました。

小学6年から中学1年をつなぐ「演劇的手法を取り入れた授業」

小学校6年生の「演技的手法を取り入れた授業」は、年間3回やります。1学期が「コミュニケーションゲーム」、2学期が「対話劇を体験しよう『転入生がやってきた』」、3学期は「ダメですか？ ダメですよ」。いずれもオリザさんのプログラムです。中学校は「ジェスチャーで場面作り」、2学期は「オリジナル短歌と演劇作り」、3学期が「会話劇を作ろう『○○を伝える対話劇を作ろう』」。これらを紹介する映像はホームページにアップしておりますので、参考になさりたい方は、ぜひ見ていただけたらと思います。

授業の終了後には、リフレクションとして事後研究会を必ずします。子どもの様子はどうだったのか、変化があったかどうかということを、教員、平田さんなどの演劇ワークショップを進行してくださった人たちなどと話します。

定性評価と定量評価

学校文化というのは、教育効果、教育評価を語る際、「子どもの顔が生き生きしてるね」とか、「何か明るいんだけども」とか、「なんか暗いんだけども」とか、イメージで語ることが多いんですけども、教育効果があるかどうかの判断は、教員の持つイメージや印象評価といった定性評価だけではなく、定量的な評価が必要だということを私は8年間言い続けてきました。数値に表して、それをエビデンスにして教育政策をつくっていく。そうしていきたいと思い、青山学院大学の苅宿先生にお願いをして、「コミュニケーション授業」も検証をしていただきました。この結果が今皆さんのお手元にあるデータです。

また、「やり抜く力」、「メタ認知」、「協働性」といった三つの柱において、演劇ワークショップがどう子どもに影響を与えうるのかも検証しました。教科教育と演劇ワークショップを比べてみると、明らかに全ての項目において演劇ワークショップでプラスの効果が出ました。

この指標は、(*3)四件法を用いて20ぐらいの項目で子どもたちにアンケートを行い、それを分析してもらった結果です。青山学院大学独自の調査方法となっています。私が特に注目したのが学力調査の結果です。学力調査の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりすることができていますか」という項目を見てください。コロナ禍の令和2年度だけは調査していないのですが、「コミュニケーション教育」を始めた頃には、中学校においては国の平均値の方が豊岡市より高かったんです。平成28年に「そう思う、どちらかといえばそう思う」と答えた割合が、国が64.8ポイント。豊岡市では62.2ポイント。その頃の豊岡市の中学校では、まだチョーク&トークで一方的に先生が説明し、子どもたちは黙ってひたすら板書を書くような、そんな授業していました。

それが、令和5年の調査では、当時から25.2ポイントも上がっているんです。国も協働的な学びを推奨しだしているので全国の数値も上がっていますが、やっぱり令和5年には国と豊岡を比較すると有意な差で豊岡の方が高い。これが正直な子どもたちの感想であろうなというふうに思います。下の問いもそうです。「あなたの学級では生活をより良くするために、学級会で話し合い、互いの意見の良さを生かして解決方法を決めていますか」。これにもコミュニケーション授業の効果が出ていて、全国比4.7%から7.2%、中学校ではこのような差が出ています。

小学1年と2年の「演劇ワークショップ」～貧困対策としての非認知能力の向上

小学校1年生2年生の「演劇ワークショップ」の導入のきっかけは非認知能力の向上でした。貧困対策で始めました。豊岡市の貧困率は高く、どうしようかということを当時の市長と一緒に協議をしていました。福祉部局は就労支援であるとか、経済的な支援をしますが、やっぱりそれだけでは駄目だ、子どもの貧困の連鎖を止める必要があるということで、教育委員会として何かやれないかという話が出ました。一生懸命、貧困の連鎖をどう解消できるのかと考えたときに、一つのヒントが浮かびました。学力調査と出身家庭の社会階層社会経済的背景(SES)です。両親の学歴と収入といった指数と学力には相関関係があるという調査研究がありました。SES指数が高い子は、もちろんばらつきもなくて学力も高いのです

が、低い子でも一定数、学力の高い子がいました。なぜなのかをお茶の水大学が検証した結果、非認知スキルに関わるような投げかけを学校や家庭がやっていたことが分かりました。

非認知能力については、OECDも、平成27年に社会情動的スキルという言い方で大切だと言い出していたのですが、当時は私はあまり意識をしていませんでした。

非認知能力の中で重要視した「やり抜く力」「自制心」「協働性」

非認知能力には何十もあるのですが、豊岡市はその中で「やり抜く力」、「自制心」、「協働性」の3つに焦点を当てて取り組むことにしました。なぜかというと、この3つは学校が得意なことで、学校で身につく可能性が高いと考えて、そこに焦点を当てました。(＊4)

そうして非認知スキルを高めることが大事だとわかりました。何とかしなくちゃいけないこともわかりましたが、どうしていいかわかりません。平田さんに相談すると、隣の鳥取県にある義務教育学校(小中一貫校)で、青山学院大学の先生が非認知能力を高める取り組みをやっているから訪ねてみたらと教えてくれました。そこで、ダンスとか演劇とかメディア表現などアウトプット型の教育が非認知能力に有効であるという話を聞きました。であれば、これまでずっと平田さんにお世話になっていますし、豊岡は演劇的手法を活用する。それが一番合理的で、しかも効果があるだろう。先生たちの理解も得られるだろうということで、演劇ワークショップを始めることにしました。そして、その検証・評価を、エビデンスをつくるために同じように青山学院大学にしていただくことにしました。

教科教育、普段の授業。これらを受動的な体験と位置づけました。そして演劇ワークショップを能動的な体験と位置づけて、受動的な営みと能動的な営みにどんな差があるかを、「やり抜く力」、「自制心」、「協働性」の三つの視点から検証していきました。中学生と同じように、ワークショップなどの能動的な体験の方にプラスの変化がみられました。しかも1学期2学期3学期と学期を追うごとに高くなっていくというような結果が出ました。ただ、これは平均値なので、私たちが検討しなければならないのは、どんな特徴のある学校や子どもたちにとって効果があるのかということを検証する必要があると考えました。

B小学校の1年生の事例です。(＊5)教科教育の青い△は本当に△が小さく、自制心も協働性も自己効力感も非常に低い。それが演劇ワークショップをやった後は赤のような△になっていく。そして3学期、2学期と比べると、教科教育の方もかなり評価も高くなってきた、というようなことが分かりました。B小学校には特徴的な子どもたちがいるのですが、その子たちが取り組みの結果、変わったということです。D小学校についてもこのように明らかに演劇ワークショップ後に変化がみられます。(＊6)

時間が来ましたのでこれで終わりますけども、もちろん、演劇ワークショップだけで非認知スキルは向上しません。普段の学校の全ての教科領域の中で非認知スキル向上に取り組んでいく。キーワードは適切なトライアンドエラーです。そして、褒める、認める、一緒に喜ぶ、というようなことを行います。これを学校行事でも教科学習の中でも取り入れていこうという文化が、豊岡市の中で少しずつ、今、芽生えてきたということです。まだ話し足りないことたくさんありますし、答えがなかなか見えにくいかもしれませんので、これはまた後でトークの方でお話しできたらと思います。

高尾　嶋さん、どうもありがとうございました。平田さんの発表までの繋ぎで少しお話をさせていただくと、嶋さんのお話ですごく印象的だったのが、まず一つは教育の話でありながら教育の話に限らない。それは福祉の話にも繋がるし経済の話にも繋がる。特に地方では、それらはかなり一体化しているので、そこに教育という角度から地域全体にアプローチしていくということだったと思いました。もう一つは、教師による印象評価ももちろん大事なんだけど、それに限らずに定量的な評価も使いながら、本当に子どもたちがどういう力をつけているのかを見ておられるのが非常に興味深いなと思いました。

では、平田さんの準備ができたようです。よろしくお願いします。

平田オリザ氏 発表

学習指導要領「主体的、対話的で、深い学び」？

平田です。よろしくお願いします。嶋教育長と全く打ち合わせをしてないので、重複しないようにします。今日いらしているのは教育関係者の方も多いと思うんですけれども、まず学習指導要領について。今回の学習指導要領には、「主体的、対話的で深い学び」ということが強く言われています。「主体的」というのはわかるんですけれど、「対話的」ってあまりよくわからないですよね。あと、「深い学び」って何だ？ 浅い学びなんてないだろうとも思いますよね。文科省もちょっと曖昧すぎますよね。主体的、対話的というのも時に相反するんじゃないかとか。今日はここら辺を考えていきたいと思うんですけど、はじめにまず、私が実際にやっている演劇ワークショップを紹介します。

「転校生がやってくる」

三省堂の中学校の国語の教科書に2002年に採択された、もう20年間使われている「転校生がやってくる」というスキットがあります。転校生がやってきて、「長野からきた何とかです」と言って、「趣味は何ですか」とか聞かれて、そうしたら先生がいなくなって、子どもたち同士が話をして、と2分ぐらいで終わります。

1時間目はスキットをちょっと変えて発表。2時間目はワークシートを使って自分たちでスキットをベースに劇を作って、3時間目に発表。3コマで終わる授業です。面白いのは、1時間目からいろいろ変えすぎちゃう班とかが出てくるんですね。もちろん変えていいんですけど。「長野から来た」を例えば静岡とかに変える班とかもあります。「趣味は何ですか」「もっと面白いこと聞けよ」「前の学校ではスキー部にいました」。静岡ですからスキー部はそんな一般的じゃないと思うけど、私立だったら、まあ、スキー部あるかもしれないですよね。「スキー部の割にはそんなにうまくないけど」「でもスキー部だったんでしょう？」「静岡じゃ、みんなやるから」。静岡じゃみんなスキーしないですよね。でも、こういう班がいてくれるとありがたくて。「今のちょっと変だったよね。静岡に変えたチャレンジは良かったんだけど、みんなやるから、でみんなあれ？ ってなるよね」っていえるので。

授業の最初に、「今日の授業は普段の授業と違って嘘をついてもいいよ」って話をするんですね。「普段の授業だと、授業中に嘘をつくと先生に怒られるけど、今日の授業がうまく嘘つくと褒められるよ」って話をします。そして、「嘘をついていいって言ったけど、嘘をついたから褒められるんじゃないんだよね。うまく嘘つかないと褒められないんだよね。嘘ってすぐばれちゃうでしょ。だからうまく嘘つかないと駄目なんだよね」って話をします。

これに言語運用能力などの要素も入ってきます。例えば、スキーをテニスに変えた班。「テニスって上手いの？」「いやそんな上手くないけど」「でも、テニス部だったんですよ」「長野じゃ最近流行ってるから」「テニスやったことある？」「あるよ3回ぐらいだけど」「え、いいな。私やったことない」「私もない」「じゃあ、3年なったら行こうよ、みんなで」「うん。行こう行こう」。この場合は、「これはどうだろう。なんかちょっと背中がむずがゆくなるよ。スキーは行こう、だけど、テニスはやろう、だよね。嘘って、こんなちっちゃいとこでばれちゃうからね」と伝えます。

「宇宙から来た、とか、ロケット部にいました、とか大きい嘘使う方法もあるんだよ」と伝えるときもあります。「宇宙から来た、なんて大嘘なのに、全部が繋がってると嘘がばれないよね。行こう行こう、だけで嘘がばれちゃうのに、言葉って面白いよね」みたいなことを伝えたりもします。

「喋らない」表現、「いない」表現

そして2時間目に入っていくんですけど、僕はできるだけ授業に関与しないようにするんです。とはいえ授業ですから、当然、停滞してる班のところにはアドバイスに行くわけですね。

例えば、朝、先生来るまで、子ども達同士で何の話をするか決まらない班とか。「何話す？」って聞くと、もうみんなシーンとしちゃうんですね。でも、「今朝、何話した？ いつも何話すの？」と聞くと、大体どんな子でも答えられる。最初は優等生的に「じゃあ、宿題の話します」とか、運動会が近かったりすると「運動会の話します」とか。そしてだんだん決まっていくんですけど、当然黙ってる子がいるわけですね。それで「君、朝、何話した？」って聞くと、「話さない。寝てたから」とか返事がある。そしたら「いいねいいね。じゃあ、寝てる子の役にしようか」って伝えます。もっと黙ってる子に、「君どう？」って聞いて、「いない。遅刻ギリギリに来たから」とか言われたら、「いいねいいね。じゃあ遅刻してくる役にしようか」ってなるわけですね。3時間目の発表になると、みんなで真面目に宿題の話している班よりも、宿題の話してるやつの横で、こう突っ伏して寝てるやつもい

れば、やばいやばいって途中から入ってくるやつもいというのが、演劇としては圧倒的に面白くなります。

その時に子どもたちは喋らないってことも表現なのか、いないってことも表現かもしれない、ってことに気がついてくれるわけで、表現の概念自体が広がる瞬間がある。ただこれ、やっぱり、従来型の国語の授業からすると、ちょっと逸脱したものです。文科省が定めた国語教育の柱は四つです。「読む」「書く」「聞く」「話す」ですね。「話さない」っていうのはないんですよ。ましてや「読む」「書く」「聞く」「話す」「話さない」「いない」ってなったら、もう授業じゃなくなっちゃう。

でも私達アーティストからすれば、「喋らない」のは立派な表現です。「いない」ということも表現かもしれない。そういう時こそ、子どもたちの表現の幅が広がっていくっていうことなんですね。ただ、こういう授業をしてますと、たまに、「コミュニケーション教育なんて、コミュニケーション苦手な子がかわいそうじゃないか」っていう何かもう、いちゃもんのような意見が時々あります。「音楽苦手な子がいるから音楽の授業やらない」って話にはならないだろうとか思うんですけど。新しいことやろうとすると、当然そういう反発がありますね。

子どもの個性を活かす演劇教育

以前、豊岡で僕がモデル授業やったときに、緘黙の子がいて、家で話してるということは分かってるんだけど、担任の先生は一度もその子の声は聞いたことがない。ただ、田舎の小学校なんで、教育長がおっしゃったように、みんな仲はいいんです。すごい周りのみんなは優しくて、1時間目は手を挙げたりとか、うなずいたりとか、喋らないでもできる役を作ってあげて。2時間目にはですね、その緘黙の子を周りの子が大胆にも転校生、主役にしたんです。シャイな転校生という役柄で。「趣味は何ですか」とか質問があると、その子は担任の先生にコソコソって演技をして、それを担任の先生役が「サッカーだそうです」とかってやってる。もう終わったら、その子すごいやっぱり笑顔なわけですよ。

普段の社会科の研究発表とかだと、ほとんど参加できないんだけれども、演劇だったら、そういう役にしてしまえば役割がちゃんと担えるわけです。僕はよく小学校の先生方には、声の小さい子がいたら無理して大きい声を出させないでいいですよと伝えます。声の小さい子は、声の小さい子って役をやらせりゃ一番うまいですね。そして「うわー、声が小さい役うまいね」なんて言ってると、その子、だんだん自信持って声大きくなっちゃって、声の小さい役ができなくなってしまったり。これが、演劇教育の最大の強みで、要するに、その子なりの居場所が作れるってことです。出なくてもいいわけですよ、出たくなきゃスタッフとかやってりゃいいんで、そこが一番強みかなと思います。

非認知スキル

先ほど嶋教育長からもご紹介のあった非認知スキルについてです。お茶の水大学の浜野隆先生の研究で、困難な家庭に育っても学力の高い子には、共通した非認知スキルがあるという研究があります。物事を最後までやり遂げて嬉しかった事があるとか、難しいことでも失敗を恐れない挑戦をしているとか。これを踏まえ、豊岡市では、「学級会などの話し合い活動で、自分とは異なる意見や少数意見の良さを活かしたり折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている」、「学級みんなで協力して何かをやり遂げうれしかったことがある」という項目に重点を置いてきました。

要するに、非認知スキルって最初は、「だからしつけが大事」みたいな感じで保守派の方が注目し始めたんですけど、集中力をつけるために正座させて30分ドリルやらせるとあんまり効果がなくて、それよりもみんなで何かやって楽しくて、しかも達成感があって評価を受ける。まさに演劇がやってるサイクルなわけですが、このサイクルが一番非認知スキルを高めていくんじゃないかってことがわかってきました。

同じ浜野先生の調査に、小学校6年生の学力テスト上位25%A層と下位25%D層の家庭環境を調べたものがあります。一番上位に来ているのはやっぱりこの「家には本がある」とか、「読み聞かせをした」なんですけど。面白かったのは、「博物館や美術館に連れて行く」が15.9ポイント。これは「毎日子どもに朝食を食べさせている」の10.4ポイントより全然上なんです。子どもの学力を高めたかったら、朝ご飯食べさせるより美術館に連れて行けばいい。これと全く同じような統計で、アメリカでは「劇場に行く」、「ミュージカルに行く」っていう項目があります。

ショッキングなのは「ほとんど毎日子どもに勉強しなさい」と言うと国語でマイナス5.7ポイント、算数ではマイナス7.3ポイント。気をつけてくださいね、勉強しなさいっていうのは逆効果です。そして親にもっとショッキングなの、これです。「子どもの勉強を見て教えている」0.9ポイント、算数はマイナス1.1ポイント。とはいえ、本当はこんなわけないですよ。教えた方がいいに決まっている。でも、教え方が悪いと嫌いになっちゃってマイナスの子もでちゃうから、統計上は0になっちゃう。

「子どもが英語や外国の文化に触れるように意識している」と国語で17.5%です。全く同じ浜野先生の統計で、幼稚園時代に英語の塾に通っていた子の、中学校時代の英語の成績には全く相関性がないっていうデータもあ

る。でも、これも相関性がないわけはないんですよ。でも、お金かけて英語の塾行かしても嫌いになっちゃったらマイナスなんです。大事なのは好奇心だと思います。要するに博物館や美術館に連れて行くのは、そこで何かを学ぶためではなくて、なんだろうって思う気持ちのためなんだと思うんです。家には本がたくさんある。これは親の蔵書です。難しい本の方がいいと言われてます。子どもは親がやっぱり好きなんで、親が何の本を読んでるかを知りたいんです。好奇心さえ持たせれば、子どもは勝手に学ぶってことなんです。教える必要はあんまりないってことなんですね。教育長の話にもあったように、SESの高低に関わらず、特定の非認知スキルを高めることができれば、学力を一定程度押し上げられる可能性がある。確実に関連性があるってことですね。そうするとですね、こういう子たち、どういう子たちなのかだんだんわかってくると思うんです。

長期記憶が残る教育とは？

最近よく学校でも「学び合い」という言葉が使われます。これは実際にスキルとして、「はい。これから5分間学び合いタイムね。今日習ったこと隣の友達と教え合って」みたいにやるんですけど。有名な教育統計があります。一方的な授業では、長期記憶は5%ぐらいしか残りませんよ。プリントにすると10%、AV機器使うと20%、実験授業は30%、ディスカッション入れると50%、体験授業75%。でも一番いいのは、人に教えた経験で長期記憶90%、という統計なんです。

子どもたちは、教員の言っていることなんて、ほとんど聞いてなくて。これね、実際授業をやってみればわかりますよ。子どもはほとんど聞いてない。だから教員は繰り返し繰り返し言うんですよ。子どもが教科書を読めないなんて当たり前です。教科書読めないのは前提なんです。現場の教師はみんな知ってます。だから、繰り返し繰り返しプリントにしたり、AV機器を使ったり。それでも、一番子どもたちの記憶に残るのは、友達の失敗や、友達の成功や、友達から教わったことや、友達に教えたことなんです。そう考えると、困難な家庭に育っても、塾に行ってなくても学力が高い子たち、というのはどういう子だかわかりますよね。隣の子にこっそり教えてる子です。それはその子の心根の優しさから教えてるだけなんだけど、その教えるという行為がその子の脳にフィードバックして長期記憶に繋がっていく。

今の時代は、私達の世代のような受験競争なんてもうないんです。私立大学の実質倍率はほぼ全大学で2倍以下です。もっと多いように感じるのは水増ししてるだけなんで。今は、私達の頃の5倍10倍っていう時代じゃないんですよ。だったら、今まで目指してきた、受験に強い、要するに競争に強い子を育てるよりも、隣の子にこっそり教えてあげる心の優しい子を作りませんか？ あるいは緘黙の子に居場所を作ってあげられるような、自分と異なる存在や少数意見の良さを活かせるようなリーダーシップを育てませんか？ っていうことなんです。それはその子の学力も高めるし、クラス全体の学力も確実に高めるっていうことなんです。

学力を高める演劇／表現教育

今までは演劇教育とか表現教育というのは、「それも大事だよね」とか、情操教育の一環として捉えられた。そうじゃなくて、こういうことが確実に学力、全体の学力を押し上げていくんだってことがエビデンスとして表れてきた、ということだと思います。非認知能力って、僕、よくハンカチに例えるんですけど、どれか1個上げると、他のものも上がるっていう要素があります。ハンカチって、どっかつまむと全体が山状にふっと上がりますよね。そういうイメージです。非認知能力でつけたい力は、まず、自己効力感ですね、それから目標達成能力。協働性。思いやりとか、他者への関心。他者に興味を持つってことです。それから、感情コントロール。でも、やっぱり僕は、一番大事なのは好奇心を持たせるってことかなというふうに思っています。

学校でしかできないこととは？

そう考えるとですね、この学力の3要素。文科省がずっと言ってきた「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」。今までは、知識や技能を土台にして、主体性・多様性・協働性が培われるって言われてきたわけですけど、逆なんじゃないかってことなんです。主体性・多様性・協働性といった土台によって、知識や技能が身につくんじゃないのってことなんです。

皆さん、反転授業ってお聞きになったことありますか？ 家でPCとかで予習をして、学校ではディスカッション型の授業、アクティブラーニングをするというものです。これ、実は何が反転したかをちゃんと押さえておくべきなんです。反転したのは、これまで教員や学校が持っていた権威、権力の源泉で、それが反転したんです。これまでは教員が知識や情報を抱え持っていたから、子どもたちは学校に来ざるを得なかった。学校に来なければそれを受け取ることができなかったんです。でも今はもうインターネットの時代で、知識や情報は、いつでもどこでも誰でも手に入れることができるようになったんです。そこにはもう価値はないんです。それがしかも、今回のコロナでばれてしまいましたよね。子どもたちに。あの全国一斉休校措置のときに子どもたちは、「こんなんだったら学

校行かなくていいじゃん」と思ったと思います。もっと教員に厳しい言い方をするなら、「こんな授業なら学校行かなくていいじゃん」と思ったと思うんです。

でも本当は違いますよね。本当は違うんです。学校でしかできないことがある。主体性・多様性・協働性をつけるのは、学校なんです。オンラインではできないとは言わないけれども、主体性・多様性・協働性はやっぱり対面じゃないとなかなかつけられない。しかも、本来は、学校は伝統的に子どもたちに主体性・多様性・協働性を身につけさせるということをやってきてるんです。だから、このコロナを奇貨として、コロナはもう子どもたちにいいことなんて何にもなかったけど、これを奇貨として、私達大人が子どもたちにしてあげられることがあるとすれば、本当に学校でしかできないこと、そして学校が得意だったことをもう一度取り戻すっていうことなんだと思う。だから、コミュニケーション教育は何も新しいことをしてるわけじゃなくて、本当の学校本来の力を取り戻す教育なんだということです。

「村を捨てる学力、村を育てる学力」

さて最後に、私が今暮らしている豊岡但馬は、東井義雄先生という教育者を生んだ土地です。東井先生は昭和30年代に「村を捨てる学力、村を育てる学力」という概念を提唱しました。昭和30年代、どれだけ子どもたちを大阪、東京に送り出すかが教員の評価だった時代に、そんなことしてたら、頭のいい子から順番に大阪、東京に出ていっちゃってどんどん村は廃れていってしまうじゃないか。それよりも、自らの共同体を守り発展させる学力をつける。どんなに知識や情報を身につけても故郷に対する愛がなければ、他者に対する愛がなければ、その学力は全く無駄なんだ、ということを提唱された方です。身近なところでは、通信簿ですね。相対評価から絶対評価に変えた最初の方で、東井義雄記念館というのが豊岡市にあります。

主体的、対話的で共感のある学び

冒頭でお伝えした教育指導要領の「主体的、対話的で深い学び」。よくわからなかったですよね。東井先生の言葉を借りながら、違う角度からちょっと考えてみたいんですけど、フランス革命の「自由、平等、博愛」。「自由」を尊重しすぎると格差が生まれる。「平等」を尊重しすぎると、個人の人権を抑圧しがちになってしまう。そこでフランス革命では「博愛」というほわっとした概念を入れました。それがフランス革命が普遍化した理由なんです。つまり「主体的、対話的で深い学び」は「主体的、対話的で愛のある学び」と言い換えてもいいんではないかと。ただ、これは文科省的には、ちょっと採用しにくいと思うので、もう一つ、私達はずっと共感力、エンパシーっていうことも最近言ってきました。エンパシーの詳しい話は今日は端折りますが、そう考えるとですね、「主体的、対話的で共感のある学び」。これが多分おそらく重要なんじゃないかと思うんです。そして、その共感のある学びを育てるのには、この演劇という手法は相当有効なんじゃないかというのが、今、豊岡市で私達がやっている活動です。一旦これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

高尾　平田さんどうもありがとうございました。また時間繋ぎをします。私は東京工業大学というところに勤めていますけれども、東京工業大学は1年生のときに必修授業で1200人の学生が30人弱の41クラスにわかれて、少人数で対話をするということをやっています。そこでやっておかないとおそらく大変なことになるので全員やってもらうんですけど。講義をまず聞いて、その講義についてグループワークをするんですけど、平田さんには、その講義の枠で東工大にお越しいただいていました。お話を聞いたあと学生たちが少人数グループで話すということをやっていたんですが、コロナ禍で、その講堂でやっていた大人数講義は動画に変わったんですね。そのため今は、先生がレクチャーされてる動画を見て、少人数対話をする、という形になっていて。レクチャーは対面でなくても可能だということが、コロナでわかってしまったことでもあるんですけど、でも後半の少人数対話のパート、クラスにやってきて話すっていうことは絶対に必要だし欠かせないと思って私達もやってます。その中でやっぱり大事にしているのは、他の人に関心を持つということ。どうしてもディスカッションって、他の人に勝つとか、他の人より優れてるってことを示すとか、他の人を批判するって思いがちなんだけど、他の人の意見を聞いてこんな面白いこと考えてるんだなとか、こういう見方もあるんだなみたいなことをそこで興味を持ってもらう、好奇心を持ってもらう。このことってやっぱり若いうちにやらないとできないことで、そんなことをやったりしております。

ということでちょっと繋ぎまして、その間にパソコンも繋がったということで。それでは宇都宮さんのお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

宇都宮聡氏 発表

世田谷区について

よろしくお願いします。未来を担う子どもたちを育て上げる上で、三つの繋がりを世田谷はどう進めていることをお話したいと思います。私も2年前まで小学校の校長をしていました。今は、世田谷区の若林にある3年目に設立された世田谷区立教育総合センターのセンター長になり、今年度で2年目です。元々は小学校があった場所ですが、いろんな教育課題に対応する前線基地として機能するよう区長からご指名を受けています。

世田谷区の人口は現在92万人です。大学は隣接も含めて17大学あります。商業地は3か所で、三軒茶屋、それから下北沢。小田急線が地下化しましたので、元線路の跡地でフェスティバルが行われていたり活気があります。そして二子玉川。玉川高島屋というデパートなんかもあります。小学校は61校で児童数39,000。中学校が29校で11,000。およそ5万人のお子さんが学校に通っています。世田谷区では、中学校を中心にして、公立だけではなく、私立の幼稚園も含めた公私立幼稚園、それから保育園、小学校をまとめ、全区的に29か所の「学び舎」といういわゆる小中一貫教育の組織を作っています。幼保小中一貫ですけども、そういった組織、学び舎ごとに、学期に1回、先生方が集まったり、子どもが集まったりしながら、授業を見合ったりやったりしながら、小中一貫教育を進めていこうとしています。

世田谷区独自教科「教科日本語」

世田谷区には「教科日本語」という独自教科があります。平成16年に構造改革特区で世田谷日本語特区の認定を受け、全区の区立の小・中学校で特別な教育課程を編成して、教育活動を実施し始めました。教科なので教科書があります。教科書は、中学校で1年生、2年生、3年生、小学校は1～2年生、3～4年生、5～6年生と全部で6冊の教科書を作っています。「教科日本語」は、子どもたちが言葉の大切さに気づいて、言葉を通して深く考えて、自分を表現して、心を通わせる喜びを知り、日本文化を大切にして、新たな文化を創造してほしいという願いが込められています。これが、教科日本を紹介するリーフレットなのですけれども、平田先生の写真が入っているように、著者としても平田先生のことを紹介させていただいています。

「教科日本語」の教科書は、実は文部科学省に申請をかけ許可を得れば、教科書ですから、どこの自治体でも教科として認められるんです。教科書の中をのぞくと、中2の教科書に平田オリザ先生の名前があります。平田先生に教科書を執筆していただいているわけです。書いていただいている中身は、「演劇で育むコミュニケーション力、わかり合えないことから」。みなさん、平田先生の本『わかりあえないことから』読まれたことありますか？ 教科書は、この本を基にしています。『わかりあえないことから』は、私もなるほどなるほどと頷きながら読ませていただきました。世田谷の子どもたちは幸せだなって私は思っています。平田先生のこの教材は、中学校の「教科日本語」の構成は「哲学」「表現」「日本文化」ということになっているわけですけれども、その「表現」の領域になります。

豊岡の魅力

実は先週、豊岡市にお邪魔しました。今回のシンポジウムでお話させていただく前に、平田先生、嶋教育長の取り組んでおられることを現場で知りたいと思ったからです。電車を乗り継いで行きました。5時間半かかりました。飛行機で伊丹経由で但馬空港から行く行き方もあったのですが、交通費が倍かかるので、電車で行きました。電車だと往復5万ですが、飛行機だと10万かかるんです。皆さんが行かれる場合は、どちらが良いかよくお考えいただくといいかなと思います。豊岡は非常にいい所でした。自然があります。温泉があります。ジオパークもあります。そして但馬牛。美味しいです。私もたくさん食べました。お店の人には高いよって言われたのですが、来て食べないわけにはいかないと思い、たくさん食べて、たくさん飲みました。そういう魅力あふれる豊岡市が進めている「コミュニケーション教育」というのと、「演劇で育むコミュニケーションの力」の指導に深い繋がりを感じました。

豊岡にはキャラクターもいます。一番左がですねコウノトリのコウちゃんです。次がですね、オオサンショウウオのオオちゃん。一番右側が実は豊岡の海側へ行くとジオパークっていうのがあって、すごく玄武岩があるところなんですけども、玄武岩の玄さんっていうんですね。ちょっとこれ気になっちゃって帰りに豊岡の駅で待合室ですかね、座って、待合室のシャッターを見たら、ガラスのところに玄さんいっぱいいるんですよ。もう見つけてですね、嬉しくなってしまいました。

教科日本語の内容

平田先生が教科書に書いて下さってる一節をちょっと

紹介します。「演劇にはどんな力があるのでしょうか？ 見る人を楽しませ、感動させ、何かを考えさせる力ということがまず思い浮かびます。では表現する立場になると、演劇はどんな力を与えてくれるのでしょうか？ 今、私達は世界中の異なる文化、宗教、価値観を持つ人々とともに生きています。異なる考え方の人に自分の考えを伝え、相手の意見を聞いて、共有できる部分を見つけそれを広げていくコミュニケーション力が必要とされています。演劇を作るとき、様々な意見を調整し、合意を形成しなくては全員で一つの表現を生み出すことはできません。演劇はお互いの表現を楽しみながらコミュニケーションの力を養う活動なのです。演劇の持つ力について考え、実際に表現してみましょう」ということで中学校２年生の教科書では、実はこれだけの厚さの単元があります。

最初は「わかり合えないことから」の読み解きから始まるんですけども、その後、落書き問題、それからフィンランドメソッド、みんな違って大変だ。これ本当は違いますよね。みんな違ってみんないいですよね。それはみんな違って大変だというトピックに移り、これを考えます。そしてワークショップとしては、例えばオリジナル短歌と演劇作りというようなことが提案されています。それから「ダメですか？ ダメですよ」。これは確か豊岡でも使っている内容ですね。それから椅子から立たせようっていう内容ですとか、まだまだいっぱいあるんですけども。そういったワークショップが、この中で中学校２年生の中で教科の単元として行っていることをご紹介差し上げておきたいなと思います。

平田先生の話だけではなく、こちらの世田谷パブリックシアターの話も出さなければならないと思うのでご紹介すると、小学校５年生で「演劇で考えてみよう。故事成語で演劇」、故事成語で演劇ってちょっと違和感があるかもしれませんが、そんな内容も入っています。６年生も書いてくださってます。世田谷パブリックシアターさんからもっと付け加えることはありますか？ あとで白井さんがお話されるでしょうか。じゃあ、これくらいで。

世田谷パブリックシアターについて、新小学一年生のスタートカリキュラム

それから、この世田谷のパブリックシアターについてちょっとご紹介をしたいと思います。世田谷パブリックシアターは、世田谷区が作って、公益財団法人せたがや文化財団が運営している演劇やダンスのための専門劇場です。芸術監督はここにいらっしゃる白井先生に今監督をしていただいております。世田谷パブリックシアターは世田谷区の学校を巡回してワークショップを実施してくれています。2023年度の実績は27校1施設、延べ200回で6175人の子たちがパブリックシアターの方々からご指導を実際にワークショップとして受けています。

ワークショップでは、例えばどんなことをしていただいているかというと、「小学校一年生のスタートカリキュラム」という世田谷区教育委員会との共同主催で実施している事業があるんですけれども、その中でクラスメイトと協働する力、表現する力、やり抜く力、主体的に行動する力というのを培うということで、自己肯定感を持ち、学校楽しもうって、1年生の子たちに思わせてくれる、そういったワークショップを実施してくださっています。自己肯定感、それから学校を楽しむ気持ちを育成するために、先ほどの豊岡の話の中にもあった、協働と表現とやり抜く、主体的に行動するという、実は非認知能力の視点にも関係するカリキュラムが編成されています。

実際のプログラムとしては、1時間目としては、シアターゲームから物の形になってみるっていうプロセスを子どもたちが体験します。そして2時間目には、絵本や紙芝居の場面をグループで表現するプロセスで、その自己肯定感等を身につけるような協働するような、そういったカリキュラムを組んでいただいています。こういった演劇的手法を生かしたカリキュラムになっているということです。

教育総合センターの役割

教育総合センターの役割としては実は三つあって、「教育の質の転換」、「乳幼児期の教育保育支援」、それからもう一つ大きな役割として「地域社会との連携推進をしていく」になります。

教育総合センターのリーフレットは先ほど入口でお配りしていますので、お手元でご覧ください。特別支援教育、不登校などの教育相談、学校ICT、教育研究、乳幼児教育、大学高校連携、区の職員研修、STEAM教育、多岐にわたった事業を推進しているところです。そしていろんな繋がりを持って子どもたちの学びと地域社会を繋げる機能を果たしているという、そういった立場の場所です。

もう少し詳しく説明しますと、どこの役所もそうかもしれませんし、違うかもしれませんが、区長の部局と教育委員会って離れている場合が多いんですね。そこで、やっぱりそうじゃないだろう。世田谷の町を学びの場にしていくためには、大学と連携をしていくためには、子どもたちの学びを地域で支えるためには、教育総合センターとしては、区長部局とそれから教育委員会が連携しなきゃいけないだろうというような形で、教育センターの中にこの政策研究・調査課というのと、事業推進担当課がというのがあって、そこが連携をして、地域の学びを作っていこうとしています。(＊7)

コンセプトは、これです。「町全体を学びの場に、世田谷で出会う、子どもが○○に出会える町」。○○に入

るのは何でもいいんです。先ほど、シンポジウムの前に今日の登壇者の皆さんとお話をしていたのですが、演劇の裏方を担う方たちが減っているというお話を伺ったんです。大学では、ハローキャリアワークというワークショップをいろんな所でやっていて、企業さんとかもやってくださってるんですけども、世田谷パブリックシアターでもやりましょうかっていう話で盛り上がりました。そういうふうに見えないところを見せてあげる、体験できないことを体験させてあげる、この学びに出会う、そういったことを今コンセプトとして考えています。

教育センターの事業

教育総合センターでは、入口に「泥んこ広場」っていうのを作って「泥遊びと洗濯講座」というのをやったんですけど、これ区長の考えなんです。やっぱりアスファルトジャングルじゃないですけども、東京では土で遊んで泥んこをこねられる場所ってないんですよね。だから、教育総合センターの前に泥んこ広場っていうのがあります。そこで、いつ来ても子どもたちは泥んこ遊びをしていいんです。水じゃんじゃん流していい。道具も貸しています。こんな場所があるんですけど。ところがですね、これやったら、課題が出てきたんです。お母さんたちがそれを見ながら「汚れるからやめなさい」って。泥んこ遊びしたら汚れるのは当たり前じゃないですか。だけども、「いや駄目だ」って、「ちょっと洋服に泥ついちゃう」って、こういう話になったわけですよ。聞いてみると、お母さんたちもどうやって洗濯したらいいかわかんない。要するに洗濯機の中に入れればどうにかなると思ってらっしゃったみたいなんですけど、いや、泥んこでべちゃべちゃになっちゃったらね、ちょっと違いますよね。擦ったり、何かいろいろ工夫が必要です。だから、これ一緒にやっちゃうよと、泥んこ遊びと洗濯講座、一緒にやっちゃおうということで、ある民間企業さんにお願いをして、泥んこ遊びと洗濯講座一緒にやった。というそんなことなどをやっています。

それから教育総合センターメッセということで、大学の学生たちが教育総合センターでいろんなブースを作って、そこに地域の子どもたちに向けて楽しいイベントをやってくださってます。国士舘、成蹊、東京医療保健、駒沢、テンプル、日本女子体育大学、他にも大学ありますけどもそういったところの学生さんたちが来て、子どもたちと一緒に楽しんでくれてます。

子どもと地域の協働ということで、さっき学び舎の話をさせていただいたんですが、「杜の学び舎」の取り組みを紹介します。「杜の学び舎」の世田谷中学校、若林小学校、山崎小学校、城山小学校、そして若林児童館や新BOP、保育館などの子ども教育関連の方々、まちづくりセンターや大学、企業などの地域団体など、そういった方々が集まって「若林サミット」という会議をやっています。会議では、「まち全体が学びの場」をコンセプトに地域の中で多様な学びの仕組みを考えています。

子どもたち、今までは、子どもは大人が用意したものを、子どもが体験をして学びを深めるという形にしていたんですけども、そうではなくて、さっきの平田先生がお話くださった反転学習じゃないですけども、子どもが構想したもの、子どもたちが考えたことに対して、大人がアドバイスを入れながら、余計なことをあまり言わないようにしながら、子どもたちの考えたことを実現させる。そういう支援をしています。実現したときに子どもたちは自己肯定感を味わっていきます。その中には子どもたちの葛藤はもちろんあるし、話し合いもあるし、なんで？ という議論もあるし、いろんなことがあると思います。

最後に。未来を生きる子どもたちに対して、私が演劇を通して育てたい力としては、まず他者の思いや気持ちを演劇という手法として表現し、自己理解を深めて自己肯定感に繋げる力。まずこれをつけたい。それから二つ目は、美しいものを美しいと感じる力。これ、私もよく感じるんですけど、道を歩いていて、花がそこに咲いていて、その花を見て、「先生、この花綺麗だね」って言う子どもたちが今少ないんですよ。例えば紫陽花の道とか歩いていると、なんか同じ色ばっかりで嫌だって言うような子がいたり。例えば紫陽花はガクですよね。花じゃないんだけども、ガクなんだけども、「何枚あるか数えてみようか」「えー面倒くさい」となるんだけれど、綺麗なものを綺麗だっていうふうに感じたり、感じて、言葉に出せる力をつけたい。それから相手の気持ちを推察して、共感できる力。今推察しませんよね。しないでもう自分の思いだけで、「嫌だそんなの」って断っちゃう子もいると思いますけども。あとはコミュニケーションを通して協働して取り組む力。先ほどから出てる非認知能力っていうのは、これはすごく大事だと思っています。さっきの平田先生の話の中にあった、自己認識とか、意欲とか、忍耐力、想像力、セルフコントロール、メタ認知、社会的能力、対応力、こういった力が学力をこれから支えていくんじゃないのかなというふうに思ってます。ありがとうございました。

——

高尾　宇都宮さんどうもありがとうございました。多分後半の方で、こういうディスカッションなるんじゃないかと思いますが、育てたい力など、共通するものがもう既に豊岡と世田谷のなかに見えてきて、すごく興味深く思いました。

それでは白井さんどうぞよろしくお願いします。

白井晃氏 発表

子どもの頃に体験してこなかった演劇ワークショップ

改めて白井です。みなさん、既にいろいろお話くださっていますので被る話も出てくるかと思いますが、まずは自分自身の話から始めさせていただきます。2年前から世田谷パブリックシアターの芸術監督を務めています。世田谷パブリックシアターは1997年に開場して、今年で27年目です。私はこの27年間、これまで劇場で一番多くの作品を演出した演出家で、世田谷パブリックシアターの公演事業とは強い関わりを持って来ました。ですが、世田谷パブリックシアターにおいて公演事業と二本柱となっている学芸事業についてはあまり関わって来てなかったんです。芸術監督に就任してからようやくこの2年、現場をあちこち見るようになって、今、学芸事業をどうしていくべきかスタッフと一緒に試行錯誤しているところです。

ところで、実は、私は「ワークショップ」というものが本当に苦手で。演劇の公演でもワークショップは良くやるんです。作品を創る時には、初めて出会う俳優さんやスタッフの方々がいっぱい集まりますので、そういった中で最初にワークショップを行ったりするわけです。俳優同士でいろいろシアターゲームをしたり。私それがすごく苦手だったんですよ。大嫌いで。なぜかというと、知らない俳優さん同士が集まって、いきなり手握って、下の名前でアキラ!とか呼びあったりね、何かシアターゲームするのが、恥ずかしくて。もう全然駄目だったんですね。なんで駄目なのか。今日の皆さんのお話を聞いて思うのは、そういうのを子どもの頃やってこなかったからなんです。例えば、音楽の授業で歌唱の練習したり、体育でダンスの練習したりはして来てますよね。だから、やれるんです。だけど演劇ワークショップとなるとえーっと腰が引けています。そんな風に考えると、やっぱり、子どもの頃から演劇ワークショップをやる機会があった方がコミュニケーション能力を高めるのに良い、そんな風に思っています。

学芸事業と公演事業 ―世田谷パブリックシアターの2つの柱

世田谷パブリックシアターは、2つの劇場があって。一つは600人ぐらいの主劇場で、もう一つは、東急世田谷線という路面電車の改札口の隣に位置するシアタートラムで、200人強の劇場です。そして、世田谷パブリックシアターは、公演事業と学芸事業、この両輪で今、事業を行なってます。

学芸事業って、何をするのか少し分かりにくいですよね。学芸事業って、ワークショップのことをいうんですかとか、教育普及のことをいうんですか、アウトリーチのことをいうんでしょうか、とか聞かれるんですけど、確かに、学芸事業にはこれらはどれも間違いなく含んでいます。それら全てに共通するエッセンスは何なのかということだと思うんですけど、皆さんのお手元に配りました、世田谷パブリックシアターの年間リーフレットでは、「見る」公演事業、「参加する」学芸事業といっています。もう少し違ういい方ですと、公演事業は、一般の方にとっては鑑賞事業でもあるので、公演事業は、創った作品を劇場でみていただく。つまり「プロダクト」を手渡していく。一方、学芸事業は、演劇ワークショップに参加していただくことを通じて、「プロセス」を手渡していく、というイメージです。

世田谷パブリックシアターの初代劇場監督の佐藤信さんが、「劇場は広場だ」という理念を掲げられていました。劇場は人が集まって作品を鑑賞するだけではなくて、誰でもが劇場に来ることができて、演劇の体験をしてもらったり、集まって話をしたり、みんなが他者の意見を聞き、他者を感じるという場であるべきなのではないか、劇場はそういう広場であるべきなのではないか、そんな風に考えられていたわけです。そういう広場となるために、学芸事業を計画して始めることなったわけんですね。
そういう演劇を通じた広場となるために演劇ワークショップを実践するようになったんですけど、一番初めは、イギリスのロイヤルナショナルシアターのエデュケーション部の方々に来ていただいて、劇場の方でスタッフがいろいろ学んでそれを習得して、日本の状況にアップデートしていきながら、始まりました。(＊8)

学校に演劇ワークショップをしにいくようになった経緯

そして劇場の三つの稽古場で定期的にワークショップを行うようになり、長期休みには小中高生に向けたワークショップをやるようになりました。演劇ワークショップでは、自分も気づいていなかった、自分が思っていること、考えていることをみんなで話し合うプロセス、それを互いに伝え合うプロセス、他の人が思っていること、考えてることを受け止めるプロセス、みんなで相談して、意見が違う場合でも尊重して、多数決ではなくてこの中で一番いいなということをみんなで決めていくプロセス、小さな演劇にまとめていくプロセス、というように色んなプロセスを経ながら進んでいきます。だから「プロセスを手

渡す」ということでもありますし、このプロセスは、非認知能力にも繋がることだと思いますけども。最終的には、集まった人たちみんなで台本のないところから一つの演劇をみんなで作っていくことを目指しています。

そこから、なぜ学校にワークショップをしにいくようになったかなんですけども。これは学芸のスタッフから聞いた話ですけど、やはり劇場でワークショップをしていますと、こういう活動に関心のある親の子どもしか劇場のワークショップにはなかなか参加しないなと思うようになったそうで、やっぱり待っているだけじゃなくて、出ていかなきゃいけないんじゃないかっていう話も学芸内で出てきていたそうです。

そして、2000年に学習指導要領の改訂により、総合的な学習の時間が始まりました。学校側も新しい学びの形を考えていかなきゃならない時代が来たわけです。それで、その頃、劇場でやってるワークショップに区内の小学校の先生が参加されたらしいんです。演劇ワークショップいいなと、こういうことを学校でもやって、学校の子どもたちが一緒にこういうようなワークショップを体験すると、もっともっとコミュニケーション能力がつくんじゃないかというふうに思われて、学校に呼んでいただくようになったそうです。我々が外に出て行きたいということと、そういうことが必要だと感じていった学校の考え方が合致したといいますか、そういう局面に入ったわけですね。

学校訪問事業「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」の開始

初めは学校に行くか行かないかといろいろ議論もあった「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」事業なんですけども、2003年に始まりました。どのように学校に行っているかというと、学校に、「学校でワークショップを授業の中でやりませんか」というパンフレットを配って、学校に応募していただく形を取っています。それで我々のコンセプトでもあるんですけども、世田谷パブリックシアターでは、演劇ワークショッププログラムの定型は作っていなくて、各学校の呼んでいただいた先生と、学芸スタッフが相談をして、何が必要か、今先生が、何を課題と感じられているかとかいうことを話し合った上で、プログラムを提案するっていう形にさせていただいています。その頃、「@スクールプログラム」という公演とワークショップがセットになったものも学校巡回ツアーを行っていました。

教科日本語の開始

そして2007年に転換点がきます。先ほど宇都宮さんからお話ありましたように、世田谷区で、教科日本語という世田谷区の独自教科が開始したんです。その教科書に、世田谷パブリックシアターが劇場でやっていた演劇ワークショップをベースにしたプログラムが載ったんですね。小学1年と2年の教科書です。これもまた、劇場での演劇ワークショップを体験された区内の小学校の先生が面白いからとおっしゃって、掲載されることになったそうです。教科書に世田谷パブリックシアターの名前は載ってないんですけど。どういう内容かというと、小学校一年生は、物になりきってみようというプログラムで、シェイプですね。みんなで相談して、4人で木を作ろうとか、4人で自転車を作ってみようとかいう、内容です。そういうのが1年生。2年生になりますと、一つの絵本を読んで、その中の登場人物をグループごとで集まって、発表するというようなことを教科日本語の小学校2年生ではやっています。教科書に載っているので、学校の先生に教科日本語の授業をやってほしいと呼ばれるようになっていきました。

教科日本語の「表現」のプログラムを執筆

その後、2020年に、教科日本語の改定がありまして、世田谷パブリックシアターは、小学校5年生、6年生と中学2年生に、表現のプログラムを執筆することになりました。(*9)今度は名前がちゃんと載っています。小学校5年生は「演劇で故事成語を考えてみよう」というプログラムです。覆水盆に返らずとか、万事塞翁万事が馬とか、そういう言葉の成り立ちをグループごとに作ってみる。それからみんなで思わずその故事成語を言ってみたくなるような身近な状況を考えて演劇にする、そんなことをやってます。小学校6年生は、6年間通ってた学校を卒業するので、学校の職員の皆さん、先生だけじゃなくて、用務員の方などいろんな方々がいらっしゃると思うんですけど、そういう方々に生徒がインタビューをして、その人のお話を演劇にして表現する、というようなことを小学校6年生の授業ではやらせていただいています。

中学2年生は、国連総会で採択された「子どもの権利条約」を読んで、どの条文が守られているのか、守られていないのか、どの条文が大事だと思うかっていうことをみんなで考えながら、これもまた身近で考えられる場面を考えながら演劇にするというようなことを中学2年生のこの巡回団ではやらせていただいてます。

区内3割の学校に

世田谷区には小学校61校、中学校が29校あります。それに加えて、教育支援センターという不登校の人たちが行くほっとスクールが3施設あります。23年度は、27校、1施設、2通級に行かせていただきまして、総参加生徒がおよそ6175名。多くも思えるんですけど、まだ30%ぐらいです。全部は回れてません、全然。僕としては全部回れるといいなということを目標にしようとは言ってますけれども、かなりの人数なので、大変な仕事にはなるかと思います。でも、30%を実現しているというのは

自慢していいんじゃないかなとも思います。

小学新1年生のスタートカリキュラム

それからもう一つ、2023年度から「小学新一年生のスタートカリキュラム」というの始めました。教育委員会と協議して、ご一緒に始めたものです。先ほどご紹介した「巡回団」事業に関しては、各小学校に我々の方から直接アプローチするわけなんですけども、「スタートカリキュラム」は教育委員会の皆さんと一緒にやってますので、学校が教育委員会に直接申し込む形になっています。「スタートカリキュラム」は、子どもたちが学校という社会生活を始めだす早い時期、4月とか5月の時期に小学校一年生の子たちに向けて演劇ワークショップを行うことで、子どもたちが学校生活を始めるお手伝いができるのではないか、ということで始めました。去年は2校だけだったんですが、今年は10校に行くことになっています。シアターゲームを通じて、遊びの中で、クラスメイトとどんどんグループを組んでいって、初めて話すようなクラスメイトと協力してシェイプなどの表現をするプログラムです。

私も、現場に行かせていただいて、あとから先生の感想などを伺いますと、子どもたちがそのワークショップ中に、これまで喋ったことのなかったクラスメイトと話していたとか、協力してグループワークができたとか、そういうのをたくさん聞きました。また、この時期には、学校の行き渋りで教室内に入ってこられない子もやっぱり1人2人は出てきますが、そういう子たちも、なんか面白そうなことやってるぞと思うのか、ちょっとずつ教室に入ってこれたりするようになったりもします。ちょっと教室に入れるようになると、端っこの方にいて、やってるうちにちょろちょろっと加わって、やってはまた逃げるんですけど、でもそうやっている内に、みんなも「4人組になって!」とか進行役に言われると、その子たちを引っ張ってきて組になったりとか。そういう様子を見ていると、こういうことを小学校一年生のときに僕はやっていればワークショップ嫌いにならなかったんだと、本当に思いました(笑)。今は、私も、演劇のおかげでこうして人前でこんな風に喋れるようになってるんですけども、そういった意味では高校ぐらいまではもう人と目を合わせられない人間だったんですけど、演劇に出会ってから、人の目を見て話せるようになったっていう経験があるので、これもっと早くにやっていければと本当に思うんです。

「ともにゃの部屋」

もう一つ、学校に行くプログラムとしては、「ともにゃの部屋」という障害当事者の方と一緒につくった作品があります。「徹子の部屋」をもじった作品で、進行役の大道朋奈さんのあだ名から、「ともにゃの部屋」となっているんですけども。世田谷パブリックシアターは、下馬地区で「極楽フェス」というアートのお祭りを年に1回やっていて、そこで、下馬地区に住んでおられて、交通事故で後天的に脳に障害を追った黒田真史さんという方のお話をインタビューして、黒田さんの人生を演劇にまとめたんです。大きな事故にあい、大変な人生だけど、悲惨さを強調した形ではなく、黒田さんの人となりが分かるように楽しいテイストでつくっている作品です。この作品はもともと、下馬地区の住民の方に向けてつくったものだったんですけども、文化庁のユニバーサル公演事業、小中学校の巡回公演事業ですけども、それに採択されまして、2023年度は、世田谷区の学校だけではなくて、福井県や福岡県、神奈川県の方にも行かせていただいております。障害をお持ちの方と、子どもたちがもっと普通に接する機会を持てたらいいんじゃないだろうかと思ってやっています。作品を通じて、障害のある人を一人の人間として捉えることができるので、ワークショップも楽しいですし、学校の先生たちからは高い評価をいただいています。

劇場は広場

先ほども、世田谷パブリックシアターの初代劇場監督の佐藤信さんの「劇場は広場」という理念をご紹介したんですけど、3階の世田谷パブリックシアターの入り口には、その佐藤さんが書かれた詩が掲げられています。私も、劇場というものは人が集まって、いろんな方々と意見を交わし合ったりとか、自分と他者との違いを感じたりだとか、だからこそいろいろとともに活動できることがあるということもありますし。それからもう一つはコロナの時期に思ったことですけど、もう本当に心が萎縮しちゃってですね、心の振幅の幅がすごく狭くなったと思うんです。この劇場というものが、公共として、まあ心の病院というか、何か感動したりだとか泣いたり笑ったりとかつまらないと思ったり、面白がったりとかで心が動かされる場として、この劇場が機能していけばいいなというふうに思っております。駆け足で喋らせていただいて、すいません。ありがとうございました。

高尾　白井さんどうもありがとうございました。「ともにゃ部屋」は東工大にも来ていただいたんですけど、本当に素晴らしい作品で、黒田さんがまず素晴らしい方なので、今日ご参加のみなさんもぜひ応募をご検討いただければと思います。

ここまで4人のお話を伺っていきまして、ここで1回休憩を挟みたいと思っています。15分休憩で、4時45分から再開ということをさせていただけますでしょうか？ はい。それでは休憩ということでよろしくお願いします。

クロストーク＆質疑応答

高尾　時間になりましたので、後半を始めたいと思います。後半は、まずは登壇者の皆さんのクロストークということで、前半のお話を互いに聞いて、もっと聞きたいことだとか、思ったことだとか、色々おありかと思いますので、そういうところからクロストークしていきたいと思っております。発表をしていただいた順で、質問や意見を出していただいてもよろしいでしょうか。では、まず嶋さんから、他の方の発表を聞かれて、この方のこういうところが興味深かったとか、もっと聞きたいとかいうことがありましたら教えてください。

嶋　たぶん、皆さんも聞きたいかと思いますので、僕が、一番最初に平田さんにした質問を改めて平田さんにお聞きしようかなと。平田さんは、演劇の授業をしている時に、一度だって子どもの演技を褒めたことは、ありません。それはなぜなのかというのが一つ目の質問。それから、子どもたちはグループでシナリオを作って、平田さんの指導を受けるんですけれども、指導を受けるとたちまち子どもたちが変わっていきますよね。平田さんは指導する時にどんなことに気を付けているのか、それが二つ目の質問です。

平田　表現教育の原則で、あまり個人を褒めないというのがあって。個人を褒めちゃうと、その子はもっと面白いことをやらないといけないとプレッシャーになっちゃうので、褒める場合は、個人ではなく全体やチームでの工夫を褒めるようにしてます。特に私たちファシリテーターはいきなり行って、クラスの事情とかを分かっていないので、ある特定の子を褒めると、それが周りにいい影響を与えない場合もあるんですね。担任の先生であれば、普段すごくおとなしい子が頑張れば、その子を褒めて構わないと思うんです。でも私たちには分からないので、基本的に個人のことはまず褒めないですね。それから、上手いとか下手は、演劇教育の場合にはあまり関係ないので、そういう意味でも褒めないですね。

僕は、大体、年間50校くらいで授業をやっているんですが、現場の先生から一番聞かれるのは、声がけのタイミングですね。モデル授業を見た先生には必ず、「ほんとに声かけないんですね」っていわれます。逆に僕にとっては、「学校の先生はこんなに声かけるのか、かけすぎだろ」って。大体、声のかけ方も全国一律で、「ヒント出そうか」っていうんです。でも、それ、ヒントじゃなくて、その先生のやりたいことなんで。そうすると、どの班も全部同じになっちゃうんですね。

ここから先はプロの演出家としてのテクニックなんですけど、5班あったら5班別々の声がけというか、別々のネタをふります。1時間目の発表では、他の班から学ぶことが多くなります。「ああ、ああいうやり方もあるのか」って学んだりすることが多いので、そのためにそれぞれ別々の声がけをするんですけど。でも、普通の先生方にそういう風にやってくださいと伝えても先生がそれをやるのは難しい。これは、プロの将棋指しが、子ども5人くらいといっぺんに指すのと同じなので。私とか白井さんは、一応、演出家なのでできますけど。どの業界でも、プロというのは判断のスピードが速いのが、一つの特徴です。それを、現場の学校の先生たちに求めるのは、なかなか難しいテクニックかなと思います。でも、徐々に身に付けていただいて。今、豊岡市の小学校6年生と中学1年生のコミュニケーション教育の授業は、基本的には教員が全部やってますので、できなくはないということですね。

高尾　ありがとうございます。ちょっと待つというか、声がけの前にどういう状況かをみるということですね。

平田　たぶん、子どもたちからアイデアが出る瞬間なのか、何か声をかけてあげなきゃいけない瞬間なのかを判断することが、一般教員にはちょっと難しいと思います。でも、これからは、表現教育やコミュニケーション教育は、必ず学校教育に入っていくので、教員側が教えるということより、子どもたちの側から表現が出てくるのを待つ勇気が必要になっていく。自信のない先生ほど待てないんですよ。教えているほうが楽なんで。まさに今、教育界では、学力観、学習観、学校観の「観」の転換が必要だってよくいわれていて。本当に文科省って勝手なことをいうなとも思うんですけど、「観の転換」って何かといえば、その教師観ですよね。教えたくて教員になった人たちが、教えないってできるようになるかどうかが大きなポイントかなと思います。

高尾　待つ勇気っていうのは、いい言葉ですね。ありがとうございます。もし、平田さんのほうで、他の方に聞きたいことがあれば。

平田　聞きたいことというか、僕も白井さんがおっしゃっていた、呼び捨てにしてやるワークショップとか本当に嫌いでやらないんですよ。あれは本当に良くなくて。日本

の教育の宿痾なんですけど。日本に取り入れるには、日本風にカスタマイズしないといけないんだけど、ヨーロッパから直輸入しちゃう。一つ事例を紹介します。学校ですぐ使えるゲーム集みたいな、本当にヨーロッパから直訳したような本が出ていて、その一番最初のゲームが、「持ってるコインを出して、その年にあったことをみんなで語り合いましょう」というディスカッションゲームなんですけど。分かりますよね。日本の硬貨は元号です。平成13年に何があったか誰も分からないんですよ。アメリカだからできるゲームなんです。1993年だったら、みんななんとなく思い出すことができる。要するに、向こうのテキスト本を完全直訳してるだけ。問題なのは、それを翻訳した人は、多分そのゲームを一回もやってないってことです。そんな程度なので、日本のワークショップの黎明期は、アメリカでもやってるから、イギリスでもやってるからって、無理して直輸入してしまって、学校とすごい齟齬が起きたりしたことを私は目撃してきました。とにかく、やっぱり日本風にオーダーメイドでやっていくっていうことが、大事かなと改めて思います。

白井　本当にその通りですよね。例えば英語圏では、ジョンとかメアリーとか、下の名前をいうのは平気だと思うんですけれど。それを、日本に導入して、いきなり「あきら！」とか呼ばれると、しかも年下の役者に「あきら！」とか指さされたりすると、ちょっとムッとしちゃったりするんですけど。あれは、なにか日本風に、ちゃんとしたほうが良いですね。

平田　そうなんです。あと、やっぱり、特に欧米のアングロサクソン系のワークショップって、向こうの自己主張の強い人たちがどうやって協調関係を作るかっていうゲームがすごく多い。無理やり日本に導入すると、本当に教員のコントロールが、逆に強くなってしまう。だって、ファーストネームで呼びましょうといってる瞬間から、相当、無理にコントロールしているわけじゃないですか。だから、逆効果になってしまう。今、日本の学校教育では、どちらかというと自己主張のできる子を育てようとしているわけだから。それなのに、欧米でやってるからって無理にやると、木に竹を接いだような授業になっちゃうので。そこは、ちゃんとカスタマイズしていくというのは、大事かなと思います。

高尾　宇都宮さん、何か他の方のお話を聞かれて、思われたことやご質問はあったりしますか。

宇都宮　演劇はよく分からないんですけど。去年秋に、国士舘大学の学祭があったんですけど、ある小学校の6年生の子たちが、そこで一つのブースをもらって、ライオンキングを大学でやったんですよ。それを一般のお客さんたち、それから大学生たちが見て、大学生が感動してたんですよ、すごいねって。何ですかねこれ？ 学長さんもいらしてたんですが、普通、歩いて通過するくらいなのかなと思ったら、ずっと最後までご覧になってたんですね。何が感動を与えたんでしょうか、平田先生。

平田　白井さん、どうですか？

白井　何でしょうね。例えば、私たちの事業に、「地域の物語」という一般市民が集まって演劇をつくるプロジェクトがあります。テーマを設定して関心をもった人が集まって。例えば、老いを考えるとか、介護のことを考えるとかがテーマだったりするんですけど、集まった人が日々感じてること、ワークショップで発見した、これまで気づいてなかったことなどから物語をつくっていって。スキルを見せるのではなくて、自分たちそのものの、感じたことを表現しようとするってことなんですけど。私なんかはそれを観ると、普通の演劇公演ではちょっと適わないリアリティがあるなって思うんです。表現している方々の感覚が本当にそこにあるってことを目撃するとですね、一つのスキルを上げて、劇場の舞台の上に立てるような訓練された俳優のからだ、テキストや戯曲があってつくることよりも、もっと感動することがあるんですね。同じような意味で、プロがやるライオンキングではなくて、子どもたちがなぜ、ライオンキングをやろうとしたのか、そこで何を見つけようとしたのかっていう、演じ手たちの気持ちがそこに入っているから、そこに観てる人たちの気持ちが揺れるんじゃないかなと思いましたけど。

宇都宮　皆さんもご存じのように、小学校で学芸会をやりますよね。実は、国士舘大学で公演した学校とは別のある小学校も学芸会でライオンキングをやったんですね。それを地域の方々にも観てもらいたい、いろんな方に観てもらいたい、学生さんにも観てもらいたい、となって。30回くらい公演したのかな、そうするとですね、Aの役のセリフを、Bの子はもう覚えてるんです。Aの子が休んじゃっても、Bの子が代わりにできる。もう劇団組んでもいいのかなって思うくらいなんですけど。もうみんな卒業して、中学校に行ってしまいましたけど。私も教員でしたから、学芸会で素人の私たちが子どもたちに指導をすることがあったんですけど、指導する時に注意するべきこと、こうするといいよってことがあったら、教えていただけると助かります。

平田　特に子どもの場合には、もう子ども一人一人の特性を活かすってことですね。それぞれバラバラなので。さっきいったように、声の小っちゃい子もいるし、棒読みの子もいるんですけど、それはそれで面白いので。私は、地元で児童劇団をやってるんですけど、作家演出家を兼ねてるので、人数がそんなに多くないこともあるし、とにかく一人一人の個性を活かせるよう当て書きとかしています。

あと、さっきの話に戻ると、白井さんもおっしゃられた

ように、コロナを通じて「場を共有する」という機会が極端に減ってしまって、特に今の大学生とかがそういう経験のないところで演劇を観たってことがあると思うんですね。元々、私たちはいろんな場を共有すること、祭りとかそういうことをやりながら、人類はコミュニティを維持してきたわけですけど。近代に入って、多分、みなさんも戯曲を読んだ経験よりも、小説を読んだ経験のほうが圧倒的に多いと思うんですけど。小説というのは活版印刷の技術によって、世界中の人が同じ小説を読むことができる。レコードで同じ音楽が聴ける。今は全部もうネットですよね。写真とかも含め、いわゆる複製芸術っていうものは、たったこの300年くらいの歴史に過ぎない。それまでの3万年くらいの間、人類はずっと一緒の場で踊ったり、見たり、ものまねしたりしてきたんで、そうやって私たちのコミュニティは元々成り立っていたので、そっちのほうが本来の形だと思うんですね。

問題は、特にコロナ以降、「場を共有する」ことの方がコストがかかるようになっちゃったんですね、いろんな意味で。感染防止とかも含めて。だから、これから先、このまま放っておくと、富裕層とか、意識の高い層とか、その子ども達しか「場を共有する」場所に行けなくなってしまう。スマホのほうがものすごく安いし、いわゆるコスパが良いので、そっちに流れてしまいますよね。そうすると、放っておくと、最近、よく体験格差といいますけど、これが広がっていって、これがまた今日の問題になっている非認知スキルに繋がっていくので、学力格差が広がる。この負のスパイラルになっちゃうんで、どっかで断ち切らなきゃいけない。ここが一つ公教育の大きな役割かなと思います。他者と場を共有する場をいかに公教育がつくっていくか。大きなポイントかなと思います。

高尾　ありがとうございます。白井さんも、ぜひ他の方のお話の中で気になったことがあればお願いします。

白井　そうですね。「場を共有する」って平田さんがおっしゃったことですが、学校は、学校の教室は、まさに場を共有する場所なわけですけども、そこで、場を共有する上で有効な表現教育、コミュニケーション力をつける教育が、学校の科目にはちゃんと位置づけられてない。このシンポジウムが始まる前に今日の皆さんと少しお話させていただいていたことでもあるんだけれど、日本には、音楽の科目はある、美術の科目はある、体育の科目はあるけど、コミュニケーションの科目は無い。

世田谷区では、小学校から中学に上がるときに、4割の子どもが私立に行っちゃうんですね。中学受験の弊害というような事態が世田谷には起こっている。認知力は塾に行って身につけてるみたいな状況でもありますし。そういう中では、それこそ小学校で行う教育っていうのは、認知的な部分ではなく、もしかしたら非認知力のほうが重要なのかもしれない。平田さんや嶋さんが豊岡でやっておられるコミュニケーション教育が、学校のシステム、日本の学校のシステム自体を変えていけるきっかけにもなるのかもしれないなと、お話を聞いてて思ったんですけど。そのあたりのことで、平田さんが感じていることをお話しいただければ、ありがたいなと思います。

平田　豊岡の場合は、前市長とそれから、前教育長と現教育長が、ちょっと、変わった方たちで。こちらにいる嶋さんは、コロナの全国一斉休校措置の後に地方創生の特別交付金があったじゃないですか。あれで、豊岡市は大道芸とか、僕の作った子ども向けの劇とかを、市内の4校、それから小学校2・3周まわしましたよね。いろんなものを子どもたちに見せたんですよ。その会議の時に、一番最後に司会の方が「教育長、なにかありませんか?」と聞いたら、「いま全国の教育委員会は学力の遅れを取り戻すことに主眼を置いているけれど、豊岡はそうはしない。スポーツとアートで学校の楽しさを取り戻すことを主眼にする。それで、その結果として学力テストの成績が落ちた場合は、その時はその時です」って。こんなことをいう教育長はいないですよ。大丈夫かなって、僕が心配になりましたけど。日本は戦前の反省から、教育委員会にものすごい権力を集中して独立性を高めてきたんです。それはそれで意義があったんです。ただし、特に豊岡但馬のような、人口減少がこれだけ激しいと、やっぱり行政と教育委員会が連動して、文化政策も連動させて、非認知スキルとか身体的文化資本とかをつけられるような教育にしていかないと、もう本当に人口減少が切実なので。そこは失うものは何もないですからね。

嶋　失うものどころか、得るものが多かったですね。コロナの閉塞感が全国に蔓延していたと思います。それで、何とかしたいと思ってるけど、何もできない。その時、あまり言いたくないですけど、首長部局は教育委員会が演劇をやることにお金出さないっていいましてね。教育委員会は教育委員会でやりなさいって。お金ないし、困ったなと。それで、考えたのが、ガバメントクラウドファンディングです。目標は100万としました。100万でファシリテーターと契約をして、全部回していくことができるだろうと。ところが、コロナの3年目でしたけど、1500万集まったんです。だから、みんなやっぱり同じことを考えたんだなって。失うものより、得るものが多かったですし、それで当分は回していきます。

あと、良かったこととして、子どもたちのコミュニケーション能力が向上することは数値で示した通りで、だけどそれだけではなく、学校の先生も変わりました。今日は教員の方もたくさんおられると思いますけど。これまでトーク＆チョークで授業をやっていたのが、この演劇の授業をやるようになってから、話し合いをし、子どもに意

見を聞き、時間がかかってもゆっくりゆっくりスローラーナーを対象にしながら授業を組み始めたんですよね。それを子どもたちが感じたので、「話し合って良いことがありますか」という項目の数値が上がりました。

それから、田野邦彦さんという方に、平田さんと一緒にワークショップしていただいているんですけど、田野さんが面白い実験をしましてね。中学1年生に向けた「困難のデザイン」をテーマにしたものなんですけど。どんな感じかというと、最初は「花火大会をみんなでシナリオを作って演じてみよう」と投げかけます。これは子どもたちはできるんです。それができたら、キーワード「ダイエット」を入れるよう伝えます。花火大会に「ダイエット」を入れるんです。子どもたちは、「えー！」っていうけどやります。で、最後に「セリフに、奇跡は起こるものではない、起こすものだ、といれましょう」と伝えるんですね。負荷をかけることで、子どもたちはコミュニケーションを取り合うんです、思考するんです。どうしたらいいか一生懸命考えます。そして、それを見ていた先生たちが気づくんです。ヴィゴツキーという学者が、「発達の最近接領域」ということをいっていますが、それはどういうことかというと、一人でできることは、一人でさせたらいい、話し合わなくてはできないこと、話し合うからこそ価値があること、これを協働的に学ばせる、ということなんです。

今、ともすれば学校の先生は、僕が見ていても、話し合う必要がないことも「はい、じゃあペアにしましょう」「グループでやりましょう」ってさせるんですね。それが、豊岡では子どもたちを話し合わせるにはどうしたらよいかを先生たちが考え始めた。これは、コミュニケーション授業のおかげです。先生たちは、困難さをデザインして、目当てをつくることが有効だと分かってくる。これは、すごく効果があったなという風に思います。

高尾　ありがとうございます。私もちょっと質問したいことがあります。宇都宮さんに、ぜひ伺いたいのですけれども。今日、全体のテーマの一つに、多様性ということがあった気がするんですね。先ほど平田さんもおっしゃったように、子ども一人ひとりの特性を見てどうするかを考える、また、世田谷区が一人ひとりに居場所がある学校にしようとするとか。先ほど、あまり伺えなかったことなのですが、センターの役割の中に、例えば不登校の支援だとか、いってみれば普通の学校の生活の中では、うまくいかない、ある種、多様性の中に含まれるような子どもたちとも、たくさん接してらっしゃると思うんですけども、そういう子どもたちに向けて、こういう演劇の持ってる可能性みたいな、なにか感じられたかなと思って、ちょっとお話を伺いたいなと思いました。

宇都宮　世田谷の子どもたちが5万人いる中で、不登校になっている子が1500人位います。その子たちは、学校というか、学ぶということに魅力を感じてないお子さんが多かったりします。なので、今、世田谷では子どもたちに色んな居場所を作ることを考えています。例えば、子どもが教室に入れない場合に、今までだと、校長室とか保健室とかそういうところにいたんだけども、学校の中に、「ほっとルーム」っていう部屋をつくろう、そこに人を配置して、勉強しなくてもいい、とにかく学校に来て話をするだけでもいいみたいな場所をつくろうとか考えています。

さっき、白井さんの方からもちょっとお話があった「ほっとスクール」というのは、いわゆるフリースクールじゃないですけども、適応指導を行う場所です。でも、学校に戻すことを目的にしてなくて、自立させることを目的にカリキュラムを組んでいる場所です。それから、「ほっとルームせたがYah！」というオンラインの支援も行っています。さっき、スマホっていう話があって耳が痛いんですけど。でも、引きこもっている子は、そこに出てきてZOOMとかで顔を見ながら、対面で話ができるようになる。それがきっかけになって、じゃあ「ほっとルーム」に行ってみよう、「ほっとスクール」に行ってみようとなってくれればいいなということを考えていたり。

先ほど、シンポジウムで話をするための共通課題を見つけたいと、演劇的手法を取り入れている豊岡に行ってきたって話をしたんですけれども、いま、「不登校特例校」を「学びの多様化学校」というようになったんですけど、世田谷でも「学びの多様化学校」というものを作ろうとしています。そこでは、基礎的な学力はもちろんつけるんだけれども、中学生なので高校に入学試験がありますから、その学力はつけていかなくてはいけないんですけれども、例えば、音楽を集中的に勉強したい子、演劇を集中的に勉強したい子、アートを集中的に勉強したい子、それを振り分けるのではなく、子どもと相談しながら、「どんなことやりたいの？」と聞きながら、グルーピングしたりしながら、じゃあ大学とつなげよう、民間企業とつなげよう。それこそ、世田谷パブリックシアターとつなげよう、というような形のカリキュラムをこれから編成して、令和8年の4月に開校しようとしています。そこでは一人ひとりの違った多様な学びが存在するようにしたいと考えてます。実は、公立校の5万人いる子どももそうなんです。一人ひとり違った多様な学び、思いを持っているので、それをどうコミュニケートしていくのかってところに演劇的手法は有効だなという風に思っています。

高尾　ありがとうございました。なんか、演劇の不思議さで、個別になっているということと、みんなでやるってことが両立してるといえますね。得てして、個別にするのか、全体でやるのか、みたいな議論になりがちなところが、演劇は両方の要素を持っているのは、すごく不思議だなって思っています。

私からはもう一つだけ、特に白井さんと平田さんにお伺いしたいことでもあるんですけども。今日ご紹介くださった演劇とか演劇的手法というのは、多くの人が、特に一般の人が持つ演劇のイメージとだいぶ違うんじゃないかなと思うんですよね。多くの人が持つ演劇のイメージは、台本があって、それを覚えて、最後、照明が当たる舞台で上演するのが演劇だと思っている。でも、今日ご紹介いただいた学校のクラスで行われている演劇は、必ずしも、そういう演劇観にとらわれない、もう少し幅を持った可能性を持ったものに感じるんです。劇場で上演している演劇の側からすると、この教育の場に出ていくことによって、演劇の可能性を広げているっていう風にも見えると思うんです。教育という接点で考えた時に、演劇ってもっと可能性が広げられるんじゃないかとか、こういう演劇の可能性があるんじゃないかなど、演劇の専門家として思われることがあったら、ぜひ教えていただきたいなと思いました。

白井　世の中が一般的に想像する演劇に、演劇的手法をつかっているような演劇や演劇ワークショップが、どういう影響を与えうると思うかというご質問、という理解で良いですか？

高尾　はい、そうですし、我々が思っている一般的な演劇観を広げる可能性があったりするのかってということです。

白井　ちょっと違う形での答えになるかもしれませんが、表現するものと見るものが1人ずついれば、そこに演劇が生じるとよくいわれます。同時に演劇は双方向だともよくいわれます。そういった意味では、学校でやっている演劇ワークショップにも、グループをつくって創作する、そしてつくったものを他のグループが見て評価するという意味で、劇場での演劇と同じ見る／見られる構図があるわけですよね。そして、そこには感想を言いあえるという意味で、もっと密接な双方向性もある。

そういうような演劇ワークショップにおける双方向の関係が、これからもっと劇場という空間にも必要になってくるんじゃないかなって思ってます。今の時代において、演劇もSNSで簡単に配信とかで見ることができるようになっちゃいましたけれども、でも、そうじゃなくて、この劇場という場に来なければ成立しない、感じられることができないような演劇体験っていうものを、もしかしたら、僕はワークショップの創作の中からヒントをもらえるんじゃないかな、という風に思っています。

高尾　ありがとうございます。

平田　そうですね。演劇、まずチケットを買って劇場に来るってシステム自体、近代特有のシステムですよね。元々そういうシステムではなかったので。チケット買って、劇場に行くってシステムは、もしかしたら、あと30年とか50年でなくなっちゃうかもしれないですね。他のもっと便利なものが色々ありますからね。あるいは、もう本当に高級なものになって。それはね、好きなアーティストとかだと、3万円出しても、5万円出しても行く方はいるので、もう超高級なものになるとは思います。しかし、今、白井さんがおっしゃってように、演劇的な行為は絶対に残るんですね。目の前で、なんか面白いことをするとか、人を楽しませるとか、そういうことは。で、そっちに、そういう原始的な演劇に帰っていくんじゃないかと思っています。それから、劇場という機能自体も変わっていって、スポーツジムみたいな感じになって、やったり見たりするみたいな。今日はやってみるかとか、今日は見るほうに回るかみたい感じになるので、僕はいいと思っています。豊岡だと、実際にそういう感じなんです、小っちゃいから。みんな下駄ばきで劇場に来て下さるし、リハーサルの公開とかも普通にやってるので。ちっちゃな町だとできるかなと思っているんですけどね。

高尾　ありがとうございます。むしろ、小さな町だからこその劇場の可能性がある感じですね。では、このあたりからフロアからも、もしご質問がありましたら。

質問者1　世田谷在住で、専修大学で政治学の研究をしている教員です。特に心に残ったのが、喋れない子には、喋らない役をつくればよいというところです。全ての人間に居場所をつくれるという演劇の包容力を感じ、なるほどなと思って思わずメモしました。そして、そうした演劇の授業で、子どもたちがわあっ！と解放されたり、楽しいなって思うことはあると思いました。だけど問題は、演劇の授業が終わったときに、「5年生らしくしてください」と言われ、「6年生らしいふるまいじゃないですよ、最上級生でしょ」と言われ、「学校にコレコレは持ってこないでください」とルールはいわれるけど、なぜって聞いても説明はされず、いじめが起こるのは心の問題だと心の教育がなされ、心の教育とは何かといえば人間とはこういうものだといわれる本質主義。これらは全部、反演劇的なものだと僕は思うんです。反演劇的ものが大量に行われているのが学校だと思う。

演劇的なるもので何かを解放しよう、何かそこで幸せになろうと思って一生懸命やる。でも、演劇の時間ではない時間帯にどんどんそれがしぼんでいく。演劇楽しいと思ったけど、学芸会やったらアリとキリギリスやらされて嫌になった、みたいな話あるじゃないですか。そういうときに、どうしたら、与えられた良質なものを守っていけるのかということについて、平田先生にお伺いしたい。

次は、これはお願いです。世田谷パブリックシアターは、シビックプライドと呼んでもいい、世田谷が誇れるものを持っている。特に、以前、9月1日に学校に来られ

ない中学生たちを呼んで、学校に行けないんだったら演劇やろうぜっていう企画をやってましたね。あれにずいぶん救われたという中学生がいると思うし、僕は演劇の持つ力ってのは、そういうことなんだと思います。毎年やってほしいんだけど、毎年やってないですよね。ぜひとも予算を付けてください。宇都宮さんは教育委員会の代表でいらっしゃるわけじゃないので、全部を背負う必要はないんですけれども、ぜひとも十分お伝えいただければと思います。

宇都宮　喜んで。

平田　豊岡市では、さっき見ていただいたコミュニケーション教育とか、英語教育とか、ふるさと教育っていうのがあって。「こうのとりプラン」というルーブリックになっています。つまり、コミュニケーション教育は演劇をやるだけじゃなくて、各教科でどういう展開をするか、というのも全部決まってます。全教員が、全教科で、そういう風になってるんですね。だから、小学校1年生から、前期はコミュニケーションの基礎力で、自分の意見きちんと言う、人の意見きちんと聞く。小5から中期で協働性を重視する。中2、中3は誰に向かってとか。わかりやすい例で言えば、体育で、前期では跳び箱を跳べた子が、跳べない子にどうして跳べるようになったのかを伝える。中期は協働性なので、4人1組で3段跳べる子、5段跳べる子、7段跳べる子、跳ばない子みたいにして、BGMとかも決めて、一緒に跳ぶチームとか、バラバラに時間差で飛んで、最後にみんなポーズ決めるチームとか決めて。そして次は、じゃあ誰に伝えるかだから、じゃあこれを保育園で見せようとか、老人ホームで見せようとか。保育園の子どもたちに跳び箱を教えるにはどうすればいいのか、みたいに、ルーブリックになってるわけです。

だから、全教員はそれを意識して、横展開をしなきゃいけないようになっているんですね。できてるかどうかは別ですけど。それでも、教育長がお話されたように、教員の教育観はずいぶん変わってきました。この取り組みのミソは、要するに、跳び箱は3段より4段、4段より5段跳べたほうが良いに決まってるんだけど、でも、世の中には、3段跳べる子と、5段跳べる子と、7段跳べる子と、跳べない子がいるから、それをどう活かすか学んでおいた方が良いのではないかっていうのが教育観の転換ですよね。問題は、教育観の転換まではいったとしても、じゃあそれを、中学校の体育教師が腹落ちして、本当に納得してやれるかどうかは別の問題で。だって、体育の先生は18歳とか22歳まで、3段より4段、4段より5段跳ぶことを命がけでやってきた人たちなんで。いやいやいいんだよ5段でも、っていうのは、よほどの、これはもう教育観の転換じゃなくて人生観の転換になっちゃう。それを、でもやっていかないと、学校観自体が変わっていかないので、そこが一番大変なんじゃないですかね。でも、やらないと日本の学校、滅びちゃうんで。で、もう、不登校、世田谷なんかではすごい量になってるということなんで、そこをどうするかでしょうねと思いますけど。

高尾　はい。嶋さん、宇都宮さん、何かそこについてありますか？

嶋　不登校に関しては、不登校になった子がこんなことを言ってました。「あそこ（学校）は、やらなくちゃいけないことと、やってはいけないことしかないから、僕は行かない」って言ったんですよね。でも、演劇的手法には、やらなくてはいけないことも、やっちゃいけないこともない。自分たちが考えてやる。さっき、白井さんは、多数決ではないベストな案を考えるとおっしゃいましたけど、そういうことなんですね、納得解なんです。だから大人が「そんなんでいいの？」って聞いたら、「これでいいの」って子どもたちはいいます。そんな子どもの様子を先生たちが見て、これが子どもたちの成長なんだなって感じられるのが、やっぱり一番大切ですよね。そういう教育観が、この演劇を通してどんどん出てきたということ、それが一つの成果かなと思います。

それから、これも平田さんに指摘されたんですけれども、演じる側はすごく良くなったんですけど、見る側はあまり変わってない。三角座りをしてじっと見ている。これがなかなか転換できないんですよね。その方が先生たち楽だから、そうさせてきたんですけれども。ワークショップの時は、「あそこはいいですね、やった！」とか言ってるんだけれども、全校集会になったり、講演会になると、聞く文化みたいなそんな風になってしまう。聞く文化から抜け出るには、演劇から学んで、聞くだけでなく「なぜか？」を常に考えていくようにする。これまでは、修学旅行があっても、修学旅行っていったい何のためにやってるんだろう、子どもにどんな力をつけたんだろうとか、ほとんど考えません。今は、非認知スキルで評価していますので、身に付いた非認知スキルの3つの観点で考えたら、「もっとこうしたほうがいいんじゃないの」って話が出てくるようになる。4泊5日の宿泊自然体験活動もそうです、体育祭、運動会もそうです。前やってたから同じようにやってたけど、これ本当に力になってるんだろうかっていうような発想の転換って言うのが、僕はこの教育から始まったような気がして。そういう学校が今どんどん増えてきてるっていうのが、一つの収穫かなということですね。

高尾　ありがとうございます。じゃあ、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮　みなさん経験あると思うんですけど、廊下を走

ってると先生が「走っちゃダメ！」と言いますよね。だけど、私が校長をやってたときには、先生たちに「そういう言い方ダメですよ」って言ってたんです。僕は「廊下は右側を歩きます。それはね、コレコレコレだからだよ」って言い方をしなさいって言ってました。そうすれば、先生もカッとしないし、子どももカッとしないし、そういう言い方に変えていかなきゃいけないよねっていうような話はしてました。あの、言い訳その一です。

やっぱり、先生の価値観を変えていかなきゃいけないというのがあって。今までは、さっき嶋さんがおっしゃったように、チョーク＆トークで授業をしてたんだけど。これからは子どもたちが意見を出した時に、ファシリテートして、カテゴライズをして、試しにいろんなことをやらせる、というふうに、やり方を変えていかないとダメだと思います。それから、先生は役者なんだっていうことを、私は若い頃から言い切っていたんですけど。例えば、高学年に教えるときに理科室行きます。理科室の準備室から、僕、白衣着て出てくるんです。「じゃあ、理科の授業始めようか」ってやるんですよ。そうすると子どもたちの気持ちが変わるんです。いつもの宇都宮先生じゃなくて、理科の宇都宮先生になって、そういう目で見てくれる。そうすると入りやすいってのが、あったりします。

もう一つ。先ほど飛び箱の話があったんですけど。まず自分が跳べないということが分かったことで、その子は納得するだろうなって。で、他の子たちは跳べない子がいるってことがわかると。つまり、他者理解と自己理解ができたんだろうなっていうふうに考えればいいかな。で、跳べる子は自分は跳べるんだ、で、跳べない子は見て、それ見て跳べる子がいるんだ、これも他者理解と自己理解。そういうふうに考え方を変えていけば、子どもたちの自己肯定感も上がっていくし。さっきお話した、演劇的手法を通して未来を生きる子どもたちを育てる力の中で、他者の思いや気持ちを演劇という手法を通して自己理解を深め、自己肯定感につなげる力、どちらにしても自己肯定感が高まる形に持ってってあげるベクトルが必要かなというふうに思いました。以上です。

高尾　ありがとうございます。私のタイムマネージメントが悪くて、もう一個くらい質問…。あ、じゃあ、こちらの方に。手を挙げてらっしゃる方。

質問者２　お話ありがとうございました。どの話も非常に、昔を思い出しながら聞けた節もあって、とても面白い話ばかりでした。自分からは質問兼提案みたいな感じでお聞きしたいことがあって。まず、オンラインのチャットツールとかを扱った授業はされてたりするのかお聞きしたいです。簡単に経歴を説明させていただくと、去年の3月、二子玉川の近くにある多摩美術大学を卒業し、今社会人２年目です。大学では、演劇をクラス内でチームとか作ってやっていました。その中でグループLINEとかつくるんですけど、オンライン上でコミュニケーションをとる中で、例えば深夜の時間帯に送っちゃう人とかいて。社会人のマナーにも通じるかもなのですが、小中学生とか、高校生とかも含め、スマホを持つのが当たり前になって、たぶんLINEとかX、インスタグラムとか使っている世代だと思うんですけど、オンラインのチャットツールの実態とか、危険性が伴うということを伝えるような授業とかされているのかなと思いました。あと、平田さんに、演劇的手法をオンラインチャットツールと掛け合わせて、そういうことを学べるようなワークってできたりするのかということをお聞きできればなと思います。

平田　大阪大学と佐賀大学の共同研究で、そういったLINEと対面をハイブリットにして、子どもを犯罪から守るというのの協働開発をしてたことがあります。問題は、特にLINEっていうのは、非常にリスクの大きいツールで。よくいわれる例なんですけど、ある子どもが「死にたいよ」みたいにLINEで書いて。で、他の子が、例えば「宇都宮死ぬな（死なないで）」ってLINEで書いたんです。でも、受け取った側が、「宇都宮死ぬな（死ぬだろうな・死ぬんだな）」っていう風に受け取って、すごく傷ついたっていう。要するに、LINEでは抑揚とかが全部落ちちゃうので。特に、日本語は高低のアクセントとかに拠っていて、主語と述語だけで成り立っている言語ではないので、すごく誤解を受けやすいですね。だから、日本でだけ異常に顔文字が発達したんですけれど、あれはそれを補ってますよね。死ぬなの後に、頑張れみたいな絵文字が付いてれば、まだよかったんだと思うんですけど。なので、そういうリスクを学ばせたりするってことは、これまでもやったことがあります。豊岡ではやってないんですけど。

高尾　平田さんありががとうございました。もっと、質問を受けたかったんですけど、時間が来てしまいましたので、このあたりで終わりにしたいと思います。それでは、本日ご登壇いただきました、嶋さん、平田さん、宇都宮さん、白井さんに、もう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

嶋公治氏スライド

1

豊岡市の学校園の現状

学校園	子どもの人数 (R6.5.1)
保育園　12 園　(公立 1園)	611　人
認定こども園　15 園　(公立 5園)	1,446　人
幼稚園　6 園　(公立 6園)	50　人
小学校　22 校	3,602　人
中学校　9 校　(私立1校除く)	1,993　人
合　計	7,702　人

2

2

小中一貫教育　豊岡こうのとりプラン

豊岡こうのとりプランの内容

前期　中期　後期

小1　小2　小3　小4　小5　小6　中1　中2　中3

ふるさと教育：小3コウノトリ(15) 小4産業・文化(10)　小5コウノトリ(15) 小6ジオパーク(10) 中1産業文化(10)　中2産業文化(10) 中3私と豊岡の未来(15)

英語教育：英語遊び(10)　外国語活動(35)　外国語科(英語)(70)　外国語科(英語)(140)

コミュニケーション教育：演劇的手法を取り入れた授業(年7時間)　「めざすコミュニケーション能力育成の4つの視点」を活かした学習・生活指導

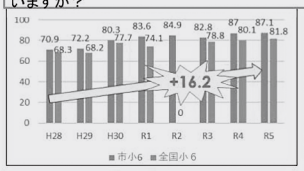
学習指導と生活指導：5つの徹底継続実践事項・授業で子どもに寄り添う・子どもの声を聴く

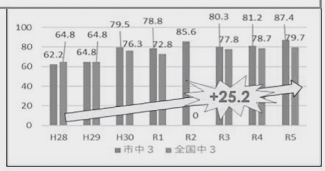
4

3

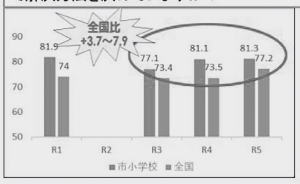
子どもにとってどうなの？
～全国学力学習状況調査　児童生徒質問紙より～

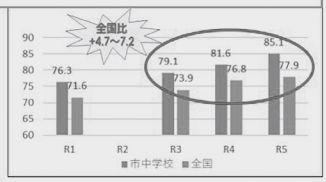
学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができていますか？





あなたの学級では、生活をよりよくするために、学級会で話し合い互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか？





1
1

4

非認知能力の分類　(出典:中室牧子著「『学力』の経済学」)

学術的な呼称	一般的な呼称
自己認識	自分に対する自身がある　やり抜く力がある
意　欲	やる気がある　意欲的である
忍 耐 力	忍耐強い　粘り強い　根気がある　気概がある
自 制 心	意思力が強い　精神力が強い　自制心がある
メタ認知ストラテジー	理解度を把握する　自分の状況を把握する
社会的適正	リーダーシップがある　社会性がある
回復力と対処能力	すぐに立ち直る　うまく対応する
創 造 性	創造性に富む　工夫する
性格的な特性	神経質　外交的　好奇心が強い 協調性がある　誠実

13

5

特徴的・変容の見られる事例(B小学校1年生)

2学期の教科教育・演劇WS → 3学期の教科教育・演劇WS

22

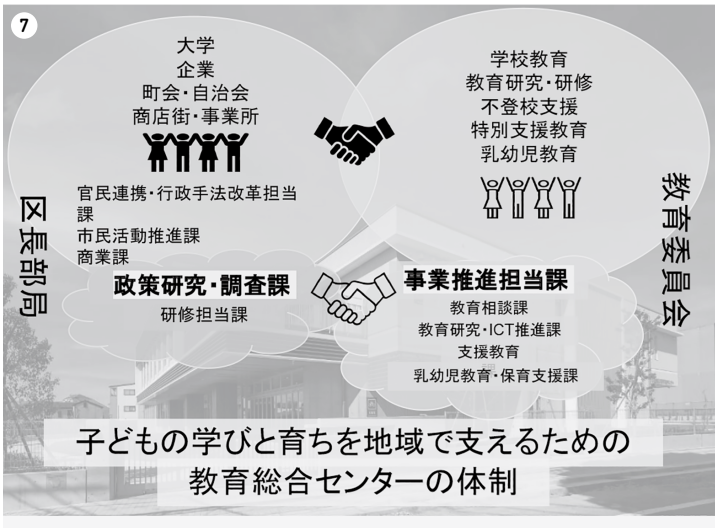
6

特徴的・変容の見られる事例(D小学校2年生)

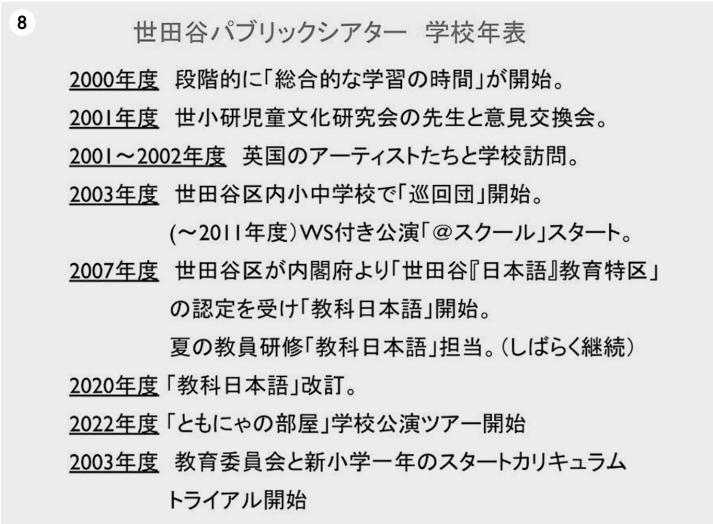
2学期の教科教育・演劇WS → 3学期の教科教育・演劇WS

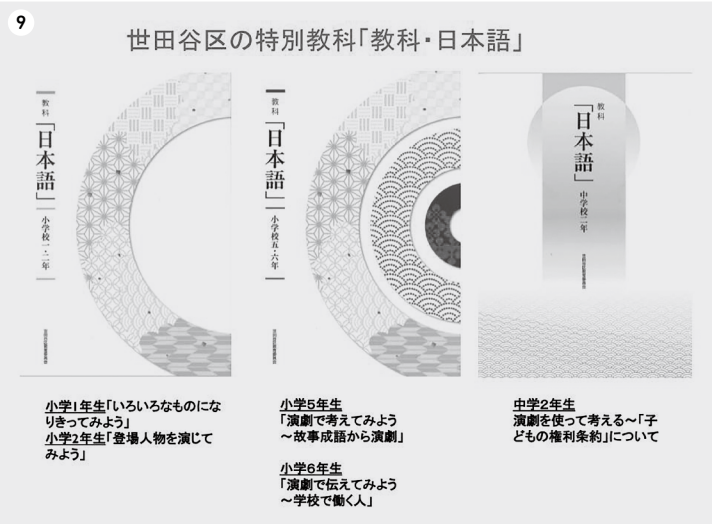
23

宇都宮聡氏スライド



白井晃氏スライド





世田谷パブリックシアター“知恵の収蔵庫”#1

シンポジウム
「教育×演劇×地域 未来を担う子どもたちを育てる
〜豊岡と世田谷の教育の新しい試み」
2024年5月25日（土）

発行日
2024年7月16日

編集・発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004　東京都世田谷区太子堂4-1-1
tel　03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアター芸術監督
白井晃

デザイン
和田みさき

世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE

シンポジウム
教育 × 演劇 × 地域

世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE

『未来を担う子どもたちを育てる ～豊岡と世田谷の教育の新しい試み』

2024年
5月25日(土)
15:00 ～ 17:30

定員　80名程度 ※先着順に受付
受講料　1,500円
お申込み　世田谷パブリックシアター ホームページよりお申込みください。
場所　世田谷文化生活情報センター セミナールーム A・B
三軒茶屋駅前「キャロットタワー」5階
お問合せ　世田谷パブリックシアター学芸 03-5432-1526

登壇者

嶋 公治
豊岡市教育長

平田 オリザ
劇作家
芸術文化観光専門職大学学長

宇都宮 聡
世田谷区立教育総合センター長

白井 晃
世田谷パブリックシアター芸術監督

司会

高尾 隆　東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授

「主催」公益財団法人せたがや文化財団　「企画制作」世田谷パブリックシアター　「後援」世田谷区

シンポジウム 教育×演劇×地域

『未来を担う子どもたちを育てる ～豊岡と世田谷の教育の新しい試み』

全国の学校教育の現場で演劇的手法を活用したワークショップ等が行われるようになって20年以上が経ちました。その先陣をきってきた劇作家・演出家の平田オリザ氏は、「コミュニケーション教育」を切り口に、学校教育に演劇を取り入れる意義を訴え、全国の小中学校で演劇ワークショップを実践されてきました。現在は豊岡市に移住され、新設された芸術文化観光専門職大学の学長として、芸術を通じた新しい共同体を紡ぎ出す取り組みにご尽力されています。こうした中、豊岡市教育委員会は、2017年度から市内すべての小中学校で演劇的手法を取り入れた授業等によるコミュニケーション教育を始めています。

一方、世田谷パブリックシアター（世田谷区）も、2001年度という早い段階から区内小中学校での演劇ワークショップをスタートしました。2007年度には世田谷区は内閣府より「世田谷『日本語』教育特区」認定を受け、区立全小中学校で「教科日本語」を開始。その中で世田谷パブリックシアターの実践をモデルにした「表現」の単元が、小学1、2、5、6年生そして中学2年生において導入されています。

このたび、学校教育における演劇ワークショップの実践においてリーディング都市といえる豊岡市と世田谷区の事例を元に、学校教育における演劇ワークショップの意義について改めて振り返るシンポジウムを開催します。それぞれの都市の教育長、教育委員会関係者ならびに演劇人を招き、二つの地域における実践から、子どもたちが演劇によってどのような力を獲得していくのか、演劇教育を行うことが教育活動全般にどのような影響をあたえるのか、21世紀の新たな教育の可能性についてを考えます。また、そうした子どもたちがどのように地域社会を担っていく人材となっていくか、地域の観点からも考えていきます。

教育の在り方に関心のある方、教育の未来に興味のあるかた、是非ふらってご参加ください。

嶋 公治
豊岡市教育長

1956年、兵庫県生まれ。関西学院大学文学部卒。1998年～99年、兵庫教育大学大学院に在籍し、東井義雄教育について研究する。2007年度より豊岡市教育研修センター所長、2010年度より豊岡小学校校長、2017年5月より現職。教育長就任以来、小中一貫教育体制の確立と併せて市内共通カリキュラム「演劇的手法を用いたコミュニケーション教育」「ふるさと教育」「英語教育」を全市展開する。また、小学校低学年を対象とした非認知能力向上のための演劇ワークショップに取り組んで3年目となる。

平田 オリザ
劇作家
芸術文化観光専門職大学学長

劇作家・演出家。芸術文化観光専門職大学学長。青年団主宰。江原河畔劇場 芸術総監督。豊岡市文化政策担当参与。1962年東京生まれ。1995年「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞、2019年「日本文学盛衰史」で第22回鶴屋南北戯曲賞を受賞。2019年より兵庫県豊岡市在住。国語教科書にも採用された対話劇ワークショップの授業を但馬地域を中心とした全国各地で行っている。

宇都宮 聡
世田谷区立教育総合センター長

世田谷区立教育総合センター長、都内小学校教諭を経て府中市、八王子市、昭島市の教育委員会で教育行政に携わった。その後、小学校の校長を10年経験し、最後は世田谷区立松沢小学校を務めた。教育総合センターでは、「世田谷のまちを学びの場に」をテーマに非認知能力の育成を中心に、乳幼児期からのキャリア・未来デザイン教育を推進している。

白井 晃
世田谷パブリックシアター芸術監督

演出家、世田谷パブリックシアター芸術監督。京都府生まれ。早稲田大学卒業後、1985～2002年、劇☆機風／全自動シアター主宰。演出家として独立後は、ストレートプレイから音楽劇、ミュージカル、オペラまで幅広く手掛ける。第9・10回読売演劇大賞優秀演出家賞、2005年演出「俵然の音楽」にて浪漫芳子賞［脚本部門］、2012年演出のまつもと市民オペラ「魔笛」にて佐川吉男音楽賞、2018年演出「メリーターク」（KAAT神奈川芸術劇場との共同制作）にて小田島雄志・翻訳戯曲賞などの受賞歴がある。

お願い事項①
- 体調が悪い場合は無理はせずにおやすみください。
- 37.5度以上の熱がある場合はご参加いただけません。
- マスク着脱はご自身の判断でおこなってください。

お願い事項②
- お申込み時にお預かりした個人情報は（公財）せたがや文化財団個人情報保護規定により管理いたします。
- レクチャー中に取材が入る場合や広報物・出版物・講演・展示等で使用する写真や動画の撮影をする場合があります。
- レクチャー中の写真・動画の撮影および録音はご遠慮ください。
- レクチャー中にけがをされた際、主催者側に過失のある場合は加入している保険の範囲内で補償いたします。
- 他の参加者への迷惑行為などがあった場合はご退出いただく場合があります。
- 感染拡大予防に関する対策は変更する場合があります。

世田谷パブリックシアター “知恵の収蔵庫” #1

シンポジウム「教育×演劇×地域 未来を担う子どもたちを育てる
〜豊岡と世田谷の教育の新しい試み」

2024年5月25日（土）